
僕の物語

ままごと

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の物語

【Nコード】

N4451I

【作者名】

ままごと

【あらすじ】

陰気少年が来た世界。それは絵にかいたようなファンタジーの世界。王道のようで王道じゃない。そんな世界。

僕の日常

6限目の授業の終わりをつげる鐘がなった。

それは同時に生徒達の憩いの時間の始まりの合図でもある。

友人と遊びに行ったり、恋人との甘いひと時に花を咲かせたり、目標の達成のために部活動に励んだり、と学生の放課後は忙しい。

はずである。

数学の教科書を片づけながら、この後の時間をどう過ごすか考えていた。

自分にとって、授業中の静寂も放課後の喧騒も同じなのだ。

だれも話しかけてこないのだから。

図書室にでも行こうかな、と思い荷物をもって立ち上がった。

本は好きだ。

小説や思想本、流行りの娯楽本に漫画、はたまた絵本まで、なんでもござれといったところで、おかげで国語の成績は抜群に良い。

無駄な知識も増える。

また図書室といった静かな所は話し相手のいない自分にとっては、心地の良い空間でもある。

今日は何の本を読もうかな、と思い少しウキウキしながら教室のドアを開けた。

「白上。ちょっといいか？」

正直、驚いた。自分に話しかけてくる奴がいるなんて。声のした方を向くと、教室のほとんどの人間が会話を止めてこっちを見ていることに気がついた。

そんなことは、全然気にせずに近づいてくる男。

九条直哉。

長身に小さく乗る顔。濃茶の髪に、それに合わせたような淡いブラウンの瞳。

つまりは美少年。そしてお金持ちの息子。しかもスポーツ万能。さらには自分に話かけてくるほどのお人好し。

他人から怨まれてしまいそうなほど、完璧に思える彼が誰からも怨まれないのは、たった一つの欠点があるから。

すごく馬鹿。ホントに。どうやって高校に入ったのかわからないくらい。まさに玉に瑕。

いや、すごくいい奴なんです。

何度も言うつうだけで自分に話しかけてくるくらい。

でも馬鹿。

「悪いね。呼び止めて。あのさ、2年になって進路調査あったろ？あれ、提出してないの白上だけなんだよ。覚えてる？」

正直すっかり忘れてた。

「わりい。すっかり忘れてた。てか、もう調査用紙がどこにあるのかもわかんないや。」

「うん、そうだろうと思って新しいの貰っておいたから、はい。」

と言ってニコニコしながら紙を渡してくる。すごい気が利く。

馬鹿なのに。

いや、そんなこと言っではいけない。

正直結構嬉しいし。

「サンキュ」

とだけ言っで、教室をでた。さっきよりもウキウキしながら。

今日は何読もうかな。

高校の割には結構な数の本が揃っている。

興味のある本はあらかじめ読んでしまったので最近では、隠れた名作を探すのが秘かな楽しみでもある。

まあ誰かに言いたくても言う相手がいないのだが。

小説のコーナーで本を適当に物色していく。

そして、本を取ろうと指をかけた時。

何かの音が耳元で鳴った…気がした。

すぐに後ろを振り返ったが、誰もいないし何もない。何の音だったのか。

鈴の音？

ふと、そう思った。

そして、それ以外の何物でもないような気がしてきた。しかし、そうであるなら尚変更である。

図書室で、鈴鳴らして回る奴なんていないよな…

本棚に目を戻すと、自分が指を掛けていた本に違和感を覚えた。

こんな本だったか？

乳白色の表紙。背表紙にもどこにも題名がない。

中を開いて読んでみると、少し幼稚な印象を受ける文章だが、内容はどこにでもありそうなファンタジーもののようだ。

ヴァルハイトていこくと、エルマーおうこくは、けんかをしていました。でもあるとき、わるいまおうが、あらわれました。まおうは、モンスターをいっぱいだして、ひとびとをくるしめました。

ヴァルハイトていこくと、エルマーおうこくはけんかをやめて、まおうをたおすためにきょうりよくすることにしました。

次のページを捲ると、続きが書いてない。

パラパラとページを捲っていくと、いきなり白紙の中から金色の文字が浮き上がってきた。

しかもその文字が渦を巻いていく。

渦はとてつもなく深いものように見え、回転を早め。

まるで自分を吸いこもうとしているかのように迫ってくる気がした。

見ていてはいけなと思った。目を離さなければと思つのに目が離せない。

わずかな抵抗も空しく視界が真っ白になった。その時。

携帯のマナーモードが着信を報せた。

不思議な引力から嘘のように解放された。

まるで、水の中にいたかのように荒ぶる呼吸を落ち着かせながら、押し込むように本を棚に戻した。

僕の叔父さん

今日は早く帰るから、飯作っつけ！

メールの内容は簡潔だった。ホストの仕事をしている叔父が早くに帰宅するのは珍しい。

自分には両親がいない。自分が小学校の5年の時に事故で他界した。残った自分を誰が引き取るかで、親戚中が揉めた。醜いものを見るような眼で見る人もいた。

そうでなくても、言葉では優しさをだしながら、なるべくなら関わりたいくないという雰囲気のでていた。

そんな中で当時から既にホストをしていて、親戚の中でも浮いていた叔父が業を煮やして自分を引き取ると言った。最後に親戚一同に向かって

「クソくらえ！」

と暴言を吐きながら、中指を立てた叔父の姿をまだ鮮明に思い出すことができた。

それから、5、6年共に暮らしてきたが、叔父は自分に家事全般を任せた。

元々母親に家事はある程度手伝わされていたものの最初は慣れなくて失敗も多かった。

しかしもう今では、お手の物である。帰ってきたときに出来上がっていないと、何を言われるかわからないので、帰ることにし、図書室を後にした。

「お前今日、誕生日だろ」

とんかつを口にほうばりながら、不意に叔父が口を開いた。

「そういえば、そうだね」

ちなみに誕生日などここ最近ともに祝ってもらっていない。故にあまり気にしていなかったのだ。

「いくつになったんだ？」

「十七」

「そうか…よし！今年は特別にプレゼントをやるう。」

そう言うのと寝室に行き、なにやら木箱のような物を持ってきた。

「開けてみる」

中を開けると銀色に輝く手のひらサイズの四角いものが…オイルライターだった。

「どうだ？いいもんだろ。ん？なんだ。微妙な顔してるな。お前まさか、十七にもなつて煙草吸わないのか？かーっ！これだから陰気な童貞君は。まあお前にはもつたないが、一度くれたもんだからな、ありがたくもらっておけ。」

自分自身、陰気なのは認めるが聞き捨てならないセリフがあった。

「童貞は関係ないだろうが！」

「おっ。なんだその態度は、この仏のような俺様に齒向かうのか？」

「仏じゃなくて、色ボケだろうが！三十すぎても未だにホストなん

かしやがって」

「ほほう。口だけ達者になったな。陰気少年。しかし、どうやら甘やかし過ぎたようだ。躑しなおさなければな」

「何が躑だ！未成年に煙草吸わせようとして。他人を躑ける前に、あんたが、モラルを学べ！このど変態！熟女好き！そんなんだからいつまでたつても一人身なんだよ！」

と言ったところで、叔父のこめかみに、青筋が立っていることに気がついた。

「本当にお口が達者になったな。雅人。そうだな久しぶりに腕っぷしのほうも上達したか見てあげるとするかねえ。」

まずい…殺される…

叔父が自分のことを名前で呼ぶ時は、かなり頭にきてる証拠である。しかし、ここまできたらもうやるしかない。低く構えると戦闘態勢をとった。

瞬間。顎を鈍痛が襲った。

叔父のアップパーが顎を正確に捕えたことに気づいた時にはもう天井を仰いでいた。

数え切れないほどの挑戦。そして全敗。

拳が叔父に届いたことは一度もない。そう体格も変わらないし、体も鍛えている。フィジカルで劣っているとも思えない。

しかし、圧倒的な差があった。何か、そう絶対的な経験の差のようなものが。

顎を冷やしながら部屋に戻った。ベッドに座り、結局もらったライターを見る。見たことのないブランドだった。叔父の口ぶりでは、

高い物らしい。

まあ、何にせよ正直うれしかった。

ライターを枕もとに置き、床に就いた。

寝てる途中、鼻がむず痒くなったので、仰向けのままティッシュで鼻をかんだ。

これが、この世界での最後の記憶になる。

僕の叔父さん（後書き）

異世界ものになかなか、異世界に行かなくてすいません。

僕の夢

夢を観た。昔の自分がそこにいた。

「親が死んでかわいそうな雅人君。」

「こいつ、この前放課後ひとりで泣いてたんだぜマジ暗いよな。」

「皆の同情引いてんじゃねえよ。」

「本当は誰もお前に関わりたくねえんだよ。孤児。」

「何あれ？またやつてるのお？」

「よしなよ。関わんない方がいいよ。あんたも苛められちゃうよ。」

「あいつが、いるせいでクラスの雰囲気悪くなるよな。」

「こなきやいいのに。」

「てか、死ねばみたいな。」

教室の扉が開く音がした。

「どいつだよ。調子こいてるってやつ。」

「あつ！先輩達。こいつつすよ。マジ、ボコボコにしちゃってくださいよ。」

「ふーん。確かに生意気そうだな。おい、こっち向けよ。話しかけてんだからさあ。」

「……」

「だつさ。お前シカトされてんじゃん。」

「うるせえ！あんま調子こいてんじゃねえぞ。一年坊が！」

何かの音がした。鈴の音？

ひどく寝心地が悪い。固いし、寒い？

床に落ちたかな？

まあなんとなく悪い夢も見たしな。

「b v b l v y v え r !」

声がきこえる。誰だ？

「k j h g f d d f g」

起こされてるのか？薄く眼を開く、視界がぼやけている。顔に掌の感触。腕枕？

抱き起こされているのか？

叔父さんじゃない。

「j k h b g ! h h ! h h ! j h g v h v g h y g g」

女の人？

なんで、ここ自分の部屋だろ。

寒い。

いや、寒すぎる。

違う。

ここは部屋じゃない！

とっさに身を起し、逃げるように相手と距離をとった。

なんだここ。薄暗い。

寝惚けてたんじゃなくて単に暗かったのか。

トンネル…

というより洞窟という感じが。

等間隔に松明のようなものが、置かれているだけで明かりらしい物は、他にない。

「k j h g f d r f y g b
r」

女の人近づいてくる。何て言っただ？

外人？

でも、英語じゃなかった。

聞いたことのない雰囲気。

西欧でもない。ロシア語とも違う。

東南アジア系か？

もしかして、拉致られた？

そんなこんな考えているうちに、明りに照らされて、姿がはっきり見えてきた。

不思議な感覚だった。

言葉だけじゃなかった。

見たこともないような鮮やかな色をした金髪。

暗い中でも、はっきりとわかる青い瞳。体格もどちらかといえば、

白人よりかな。

でも、着ている物が…なんというか、その、うまく言えないけど、巫女装束の下がないバージョン。

昔の海女さんが着てたようなやつ。

神聖な感じがあるのに、妙に色っぽい。すごい、胸元が開いている。

ああ、さっきまで、この人に抱き起こされてたんだ。
もつとああしていればよかった。

あわよくば、寝惚けたふりして、その胸に…

「l m n b v c x z !」

女の人が腕を胸の前で交差させて何か言った。

今絶対「どこ見てんのよ！」って言われた。

いや、わかんないけど。

冷静になって、顔を見てみると、まだほんの少し幼さが残る感じだ。
同じ年くらいか？

豊満な体と色っぽい衣装のせいで、少し年上に見えたのか。

「q w r y d s z g」

相変わらず何言ってるのわからない。

なんとか、ジェスチャーで伝えてみようとした。

女の子の青い瞳が、驚きと好奇心で光った気がした。両手を前に出して少しずつ、下がる。

たぶん、ちょっと待って、と言っているのだろう。

うん。ボディランゲージこそ全世界共通語だな。

なんて思っていると女の子がなにやら、ひとりで喋り出した。

呪文？まさかね。

「k l h y t d s z x c v t w q p l m k j n b h g h . j」

ああ、やっぱり何言ってるのか、わからない…なんて言っているうちに、女の子が、光り出した。

え？

いや、光ってる。

うそ？うわあすごい光ってる。

この洞窟、こんなに岩肌ごつごつしてたんだ。

そんなこんな言ってる間に、胸のあたりが特に光を集めて球になっている。

ああそんなに、光ったら逆に見えません。

と集めた光をそつと宙に浮かべると、光の球が自分に向かってきた。

そして、体に吸い込まれていく。不思議と恐怖はなかった。

光に包まれ一瞬頭がボーとした。が、光はすぐに消え、女の子も、もう光ってはいなかった。

「ねえ、あたしの言ってることわかる？」

え？

「あれ？失敗したのかな。あたしの言ってることわかんない？」

いや、あなたの言っていることはわかるんですけど、今自分に何が起きているのかわかりません。

「ねえ、なんか答えてよ。もう、聞いてるの？ねえってば！」

ああ。これも夢か。

悪い夢から、色っぽいねえちゃんの出てくる素敵な夢に変わったただけだ。

きつともう一度目が覚めたら、暖かいベッドの中だ。

そう思い、石畳の上に寝転がる。

夢だとしてもかなり、冷たく感じるなあ。

「ちょっと！寝ちゃダメだって！死んじゃうよ。起きて。起きろ！」

左の頬、そして右の頬と順に鋭い痛みが走る。

おねえさん右利きなんですね。

そうじゃなくて。痛かった。すごく痛かったです。

驚いて、目を見開いた。

.....

いや、あの、おねえさん。顔近いです。

僕の初期装備

「つまりマサトは、異世界から召喚されたってこと。」

「じゃあ、ここはどこなんですか？」

「敬語やめてくれる？ 苦手なの。ヴァルハイト王国。神の山の祠の中。でも、おかしいんだよね。こんな場所に召喚されるなんて。」

「どういうことですか？」

「普通召喚は、神の山の頂上にある祭壇で行われるの。ていうか、今その儀式の真っ最中はずなんだけど。…敬語やめてね。」

「じゃあ、こんなところで何してるんですか？」

そういったところで、レナさんが大きくため息をついた。

レオナ「アドニール」シュバイツ「クルム

略して、レナさん。

たった今お互いの自己紹介を終え、この一つ年上の美女に自分の置かれていた状況を説明してもらっていたところなのだ。

しかし、なにやらご立腹の様子。

その理由に気がついて、質問しなす。

「あの、じゃあ、なんでレナさんは、こんなところにいるの？」

「さん。はいらない。勇者召喚の儀式は大きなものだから、周りにもすごく影響を与えるの。それで、この神の山に封じられている魔物とかの封印が弱まったりしちゃうことがあるわけ。」

「へえ。」

勇者召喚の儀式ねえ…正直、王道まっしぐらな感じだ。

何故異世界から召喚するのかといった理由も、また同様に身体能力

の向上や、膨大な魔力を持つ。といったものらしい。

身体能力上がってるのかな？

と思い自分の体を見る。そして、気づく。

パジャマで召喚されるのはかなりかつこ悪いなあ。

高校生にもなってパジャマってのも問題なんだけど。やっぱりジャー
ジとかスウェットとかのほうが、まだましだよな。

「この山には、いくつかそういうところがあるんだけど、封印を破
って魔物が出てきちゃわないように、各場所選ばれた巫女が配置
されるの。それ以外の巫女と大巫女様が勇者召喚の儀式を行うわけ。

」

「じゃあ、レナさん優秀なんですね。」

「まあねえ。さん。は、いらないうて！喧嘩売ってるの？」

「いや、さすがに初対面の人を呼び捨てにするのはちょっと…」

と言ったところで、とても不吉な予想が脳裏をよぎる。

「あの、レナさん。そのレナさんがやるはずだった儀式って、もう
終わってるんですよね？」

一瞬の沈黙。そして、あつ。と小さく声を漏らすレナさん。

予想が確信に変わる瞬間。

まるで、このときを待っていたかのように洞窟内に響く、耳をつん
ざくような咆哮。

確信が現実になる。

「しまった！」

と言って、走り出したレナさんを追いかけて行くと、広い空間があらわれて。

見上げれば、吹き抜けになっていて、満月が大きな顔を覗かせている。

そして、月明かりに照らされてその姿をはっきりと現す巨大な

イモムシ。

イモムシ。芋虫。いもむし。

それが、人なんて一飲みしてしまいそうな、大きな牙のついた口を広げ天に向かって咆えている。

イモムシって鳴くんだっけ？いや、これは魔物か。

しかし、こんなものを見てしまうと、本当に自分が異世界に来ただと実感する。

なんて、言っている場合ではない。

「どうするんですか！？」

「どうしよう。破られちゃった封印を強化したって意味ないし。」

「外の人たちに助けを求めましょう。」

「無理だよ。ここから、外に出るまで3時間はかかるよ。その間にあれのお腹の中に入っちゃうよ。」

それでも、イチかバチかで逃げるか…

「ねえ。本当に異世界から来たんだよね。」

「いや、そうですよ。だから、何だって言っんですか。今そんなこと言ってる場合じゃ…」

なんとなくレナさんの言いたいことが分かった気がした。

青い瞳が月明かりに照らされて、うるうるしながら、こっちを見ている。

「いやいやいや、無理ですよ！いくら、身体能力が上がったっていても。あんな化け物いきなり相手にできませんよ！それに魔法だつて使えないし…」

「いいじゃんか！ケチ！戦つてよ。異世界人だろ！このままじゃあたし、罰則くらっちゃうよ。昇進が消えちゃうよー！てか、敬語使うな！」

「いや、その前に生きて帰れるかわかんないでしょ！そして、あなたに二度と敬語は使わない！」

「あんたじゃない！レ・ナ！」

なんて、不毛な言い争いだ。

と、思ったところで自分が物凄い手汗をかいていることに気づく。

落ち着け。こんなところで死にたかないぞ。

パジャマのズボンに手汗を擦りつけると、ポケットに違和感があった。

叔父さんからもらったオイルライター。と鼻をかんだティッシュ。

なんでこんなものが、ポケットに…

「マサト！」

名前を呼ばれるが早いかな。体が宙に舞った。さっきの言い争いで大きな声を出し過ぎたようだ。イモムシに突き上げるように飛ばされた。

痛みが走るものの、それほど痛くない。動ける。

本当に身体能力が上がってるんだな。

と宙に舞いながらしみじみ感じる。

えらく飛ばされたおかげで、吹き抜けのてっぺんの縁にしがみつくなことができた。

そのままよじ登り、てっぺんに立つ。

さすがの巨大イモムシもここまででは、届かない。壁に突進して、自分を落とそうとしている。

だが、こっちは思ったより足場がいい。落ちそうには無かった。

イモムシはこっちに夢中で、レナさん…レナは眼中に無いようだ。

ふと、自分から異臭がしていることに気づく。

なんだこれ、イモムシの体液か？

パジャマにこれでもかというほど、べっとり付いている。というか、ぐちよくちよ。

でも、その臭いに覚えがあった。

もしかしたら…

ポケットから、ティッシュを取り出した。

初期装備は、パジャマにオイルライター、それに使用済みティッシュ。
ユ。

これで、巨大イモムシに戦いを挑む！

僕の初陣

試しにティッシュにパジャマに付いた液体を擦りつけてみた。

そして、オイルライターの火を灯す。

ティッシュに近づけると、見事に火が燃え移った。みるみるうちに灰になるティッシュ。

やっぱり。

この覚えのある臭い。灯油やガソリン。つまり石油系の臭い。

これが、あのイモムシの体にどういう訳かべっとり付いてるってわけだ。

あいつの体液なのだとしたら、とてつもない弱点だけど…まあこのさいなんでもいい。

要はあいつの体は燃える。

それで、十分だ。

パジャマの上下両方とも脱ぎ、ズボンを縦長に折りたたむ。裾の方に結び目をつくり、重石にする。

つまり、ぶん回して投げやすいようにしたわけだ。

そして、未だ壁に突進を止めないイモムシに向かって叫ぶ。

「おい！イモムシ！どんなにデカかろうとなあ。イモムシは人間様に虐げられるって決まってるんだよ！」

イモムシがその意味を理解したのかは、わからない。しかし、こちらに向かって低く唸り、威嚇している。

このとき、レナの目に自分はどうか映ったのだろうか。

見上げれば月明かりを背にパンツ一丁で、巨大イモムシを挑発する男。

ズボンの結び目の方に火をつける。

何かを感じたのか、唸っていたイモムシが大きく咆哮した。

待ってたよ。そのでかい口を開けるのを。

飛び降りて、イモムシに向かって急降下する。

レナが手で目を塞いだのが見えた。

そんなものが目に付くほどに不思議と自分に余裕があるのがわかる。

タイミングを計り、火のついたズボンをイモムシの口にぶち込む。

かろうじて、口の中に入るのを避け、イモムシの体を転がり落ちる。

地面をごろごろ転がったけど、なんとか無事に着地できた。

口の中に火を入れられたイモムシは、一瞬動きを止め。高い声を出した。

さっきまでの咆哮とは違う。

これは、悲鳴。

この燃える液体がイモムシの中から出てるものなのか、それとも外部から付いたものなのかはわからない。

だったら、中と外。両方に火をつけるだけだ。

苦しみのためひどく暴れている。どうやら、こいつの中は火炎地獄のようだ。

気づいたことがもうひとつ。

こいつは頭の方はよく動くが、しっぽの方はほとんど動かない。

これなら、激しく動いている頭を遠回りすれば、難なく接近できる。

射程圏内に入らないように、注意しながら徐々にしっぽに近づく。

今度は、パジャマの上着に火をつけイモムシの体に、ふわっと被せるように掛ける。

一目散にイモムシから離れて距離をとる。

そして振り返ると、まさに火だるまになったイモムシが一度だけ大きく天に向かって体をピンと伸ばし、そして地面に倒れこんだ。

勝った。本当にできたよ。

正直、自分でもびっくりして、体が熱く感じた。

「マサト！」

岩陰に隠れていたレナが近づいてくる。

「やった。やってやったよ！あいつ丸焦げだ！」

「マサト！やばいって！」

「へ？」

「パンツ。燃えてる。」

体が熱く感じたのはパンツが燃えていたから。

ああそうか、イモムシの体を転げ落ちたしなあ。液体も付くよな。火が移っちゃったんだなあ…

……………

「やばいよ!どうしようレナ!」

レナが手を組み、ぶつぶつ言いだす。

「われの中に流れる命たる水よ。われの声にこたえ応じその力を示せ!」

「アクアレイド!」

突如、大きな水の塊が押し寄せ。体ごと吹っ飛ばされた。

「あの。レナ。火を消してくれるだけでよかったんだけど」

正直、イモムシに喰らった一撃より効いた。

「ごめん。なかなか、加減ができなくて。ほら、攻撃魔法だし。」

攻撃魔法使えたんですか。なぜ今まで岩陰にいらっしやっただんですか。

「でもすごいよ。マサト!本当にあの怪物倒しちゃうなんて。」

そう言つてキラキラした瞳で見つめられると、何も言えなくなる。
というか、すごい照れる。

無邪気に笑うレナを直視できずにいると、いきなりどこからか光の
球が現れた。

レナが光の球を取り、耳に当てる。

「はい。はい。こちらは問題ありません。わかりました。すぐに向
かいます。」

この世界の通信手段か。便利なもんだな魔法つて。

「どうしたの？」

「あと、数時間で勇者召喚の儀式が完了するらしいの。それで、役
割を終え次第、援助に来るようにつて。」

「間に合うの？」

「うーん。たぶん無理じゃないかな。さっきも言っただけど、ここを
出るまでに3時間はかかるから。正直、この仕事を終わらせて、援
助に向かうと点数高いんだけどね。」

「巫女さんの世界にも色々あるんだ。」

「まあね。」

一拍の沈黙。そして、レナが何か思いついたような顔をした。
あまり、いい予感はない。

「ねえ。まだ体力余ってる？」

答える間もなく、レナが背中に飛び乗ってきた。

「走れー！マサトー！」

なるほどね。身体能力の飛躍的に上がった自分なら、確かに間に合うかもね。

……なんて素敵なアイディアなんでしょう！
背中にレナを感じる。

「残念だなあ。マサトが勇者なのかと思ったのに。」
「なんか言っただ？」

よく聞こえなかった。かわりにレナがより強くしがみついていた。
……生まれてきてよかったです。

僕の初陣（後書き）

やっぱり表現力が足りないせいか、うまく戦闘シーンが書けませんでした。

僕の知り合い

「すごい。ホントに間に合ったよ。ありがとう。マサトはここで待っててね。」

そう言つて、レナが背中を飛び降りた。

膝をつき倒れこむ。

洞窟の石畳を走り続けること1時間程。階段を上り続けて30分くらい。

レナが予想した時間の半分くらいで、目的地にたどり着いた。いくら身体能力が上がっているとはいえ、正直なところ過酷だった。息をするたびゼエゼエ音がする。

夜の澄んだ冷たい空気のせいもあり、汗だくの体から湯気が上がっているのがわかる。

とはいえ、こんなことを可能にしてしまう自分にも驚いていた。

自分の体じゃないみたいだ。

まあ今回は、大きな不可抗力もあつたけど。

背中感触とか。

顔を上げてレナの向かった方向を見る。

この世界に来てから、驚かされてばかりだ。

まさか、これほどの数だったとは。

レナと同じ格好をしている若い女の子たちが、ざっと千人くらいか？

なんにせよ相当な数だ。正直、圧倒される。

さすがに、その中に入って行くわけにも行かないので、木の陰に隠れながら遠巻きに観察させてもらう。

幸い、視力も上がっているようだ。よく見える。

勇者召喚の儀式。

それはつまり、自分以外の人間がこの世界に召喚されるということ。何とも言えない気持だ。

30分ほどしただろうか。

巫女さんたちのよくわからない呪文が続いてる。

空を見上げるとすっかり月は消えていた。代わりに満天の星空。

元の世界では見たことのないような星の数。手が届いてしまいそう

だ。なんてベタなことを思いながら、それでも夜空に手を伸ばしてしま

う。

届くわけない。なにやってるんだか。

少し、自嘲気味に手を下すと。

空に穴。

一面に広がる星空の中で、全く星のない場所がある。まるですべてを呑み込んでしまいそうな穴。

自分の掌を見つめる。

いや、まさかね…

気がつけば、巫女さんたちの呪文のようなものも止まっていた。
広がる静寂。

そこで、自分が星を掴んでしまったのではなく、この空の穴は勇者
召喚の儀式によるものだとして理解する。

そりゃそうだよな。ちょっと、ビックリしてしまった。

空の穴の中の闇が渦を巻き、中心部から細い光が出てくる。

祭壇の中心を照らすように差し込むその光は、次第にその輝きを増
していき直視するのがつらくなってくる。

閃光。

一瞬のうちに、そこにいる誰もが目を逸らすほど光がはじけるよう
に広がり、消えていった。

視線を戻し、祭壇の上を見る。

祭壇の上に誰か立っている。

光で眩んだ目を凝らして見る。

身をおぼえのある上下黒の服。濃茶の髪。長身に小さな顔。

遠目に見てもわかる美少年の雰囲気。

そこに立っていたのは、

誰も関わりたいがらない自分に話しかけ、進路調査用紙を渡してくれ
た男。

「九条…なのか？」

九条直哉。

「九条！」

たまらず、走り出している自分がいた。

僕の成長

朝を向えた。

九条は勇者として国に迎え入れられたらしい。

昨夜は、勇者の歓迎祭が開かれたそうだ。

それは、盛大なもので誰もが新しい勇者の誕生を歓んだとか。

ちなみに、自分は今

牢屋の中にいる。

まあ、牢屋といっても罪人を収容するようなためのものではなく、お騒がせものを一時的に拘留するための拘置所みたいな感じのもので、個別にはなく、まとめて広い場所に入れられている。

今日は、祭りを仲間で楽しみ。おいしく飲んでいるうちに、全員が途中で記憶を無くしてしまった皆さんと一緒に。

「いやあ。まさかこんなところで、お目にかかれるとは。祭りで話題になった、もう一人の勇者様によお。」

「ホント、尊敬するぜ。とても真似できねえよ。」

「ああ、千を超える巫女様に向って突進する。ほぼ全裸の男。」

「しかも、唯一穿いていたパンツは、何故か燃えかけていて、かなり際どい。」

「まさに、漢だな。」

「いや、勇者だ。」

「ていうか、良かったな。囚人服貸してもらえて。」

「会えて嬉しいよ。勇者様。」

「もう、勘弁してくださいよお。」

自分がそう言うと、笑い声がいつそう大きくなった。
ていうか、見張りの騎士みたいな人まで笑っている。

「お前ら、そのへんにしとけよ。」

リーダー格の男が口を開いた。でも、笑いを堪えている。

「まあ、気にすんなよ。すぐに此処からも出られるさ。あんたも異世界人なんだろう？」

ふう、と一息つき。リーダー格の男が言った。

「何で、わかつたんですか?!」

身を乗り出してしまった。

「何でって、あんた勇者の知り合いなんだろう？勇者が、あの男は自分の知り合いだって言ってるっていうし。それに、巫女のうちの一人も、あんたが、異世界の人間だってしきりに訴えてるそうだけ。」
「ホントですか？」

九条にたどり着く前に、巫女さんたちの魔法で捕えられてしまったのだが…九条も自分に気付いたのだろうか？

それに、レナも自分のことを庇ってくれているみたいだ。

「まあ、その黒髪と黒い瞳を見れば、誰だってこの世界の人間じゃないって気づくけどな。」

別の男が、口を開いた。

「え？そうなんですか？」

「ん？まあ、まあな。」

リーダー格の男は少しバツが悪そうに答えた。

「やっぱり、不吉なものなんですか？」

異世界で東洋人特有の黒髪と黒い瞳が不吉。というパターンはよくあることだ。

ゲームとかの話だけど。

「いや、不吉ってわけじゃない。まあ、両方揃ってるってのは、かなり珍しくはあるがな。でも、かつての勇者にもおまえと同じで、黒い髪と瞳をした奴がいたらしいしな。まあ、この世界じゃ黒つてのは力の象徴みたいなもんなんだ。それが、体の主だったところに現われてれば、何かと目立つ。それだけの話さ。」

きっと、気を遣ってくれたに違いない。何となくそんな感じがした。

「この世界について聞きたいことがあれば、聞いてくれや。わかるかぎり、答えてやるよ。」

との言葉に甘えて、色々質問することにした。

実は、兼ねてから気になっていたことがある。それは、レナがこの国を

「ヴァルハイト王国」

と言ったことだ。ここで、その名に思い当たる節がある。

それは、元の世界の学校の図書室で読んだ、あの白い本。その中にも、ヴァルハイトの名が載っていた。

あの本を読んだ時の不思議な現象。

間違いなく自分が異世界に飛ばされたことと、何らかの関係があるに違いない。

しかし、もしそうだとするのなら…おかしい部分がある。

「あの、ここはヴァルハイト王国でいいんですか？」

「ああ、そうだ。」

「変なこと聞いて申し訳ないんですけど、このヴァルハイト王国が、ヴァルハイト帝国だったなんてことは、無いですかね。」

そう、あの白い本の中ではヴァルハイトは、帝国だったのだ。

普段から本を読んでいる自分が、間違うはずがない。確かにそのはずだ。

「なんだ。お前。歴史の勉強でもしたのか？確かにこのヴァルハイト王国は、その昔帝国だった。と言ってもかなり前の話だ。ヴァルハイト帝国とお隣のエルマー王国は戦争をしていた。しかし、魔王が現われたため、両国は戦争をいったん停止し、魔王を倒すために協同戦線を敷いた。」

うん。ここまででは、あの本に書いてあったとおりだ。

「しかし、魔王軍は強く苦戦を強いられる。そんなときに、7人の強きものが現われる。この7人が魔王の根城までたどり着き、その強さと気高さに感動した魔王が、隊を引いたとされている。」

「それが、勇者ですか？」

「待て、焦るな。この7人は勇者と呼ばれた記録はないし、ましてや異世界人でもない。」

魔王を退けたのが、勇者じゃない？どういうことだ？

「魔王との戦いが終わり、平和を向えたように見えたが、実際は両国ともに緊張が走っていた。なんせ、戦争中だったんだからな。」

「まさか、また戦争が始まったんですか？」

「いや、そうはなかった。国力が弱まったのを見計らって、エルマー王国で軍事クーデターが起こったんだ。穏健派だった王にしびれを切らしたんだろう。首謀者は当時の將軍。それが後に皇帝となる。」

形が違へど、どこの世界も歴史は似ていると思った。

「ヴァルハイト帝国は、この内乱に乗じてエルマーに攻め込もうとしたんだが、度重なる戦争で不満を募らせていた国民が、なんとエルマーから逃亡した王の息子を担ぎあげて、革命を起しちまったんだ。よって、エルマー王国は、帝国に。ヴァルハイト帝国は、王国になったってわけさ。」

前言撤回。無茶苦茶だ。他国の王族担ぎあげて革命起こすなんて。

「それで、魔王との戦争で疲れ果てていた上に、内政は滅茶苦茶。人々は希望を失いかけていた。そんな時に現われたのが…」

話している最中に牢屋のドアが開いた。

「異世界人。釈放だ。同時に王に謁見してもらおう。」

「おっ！良かったじゃねえか。」

「あなたたちも釈放です。しかし、毎度、勘弁してくださいよ。これで何回目ですか。」

「いつも悪いね。」

この人たち常連だったんだ。

「じゃあな、異世界人。またな。」

リーダー格の男が、自分の肩をポンと叩いた。

「あつ、ありがとうございました。色々教えてもらって。あの、名前：教えてもらってもいいですか？」

「ジンだ。ジン＝アルバート。お前さんは？」

「マサト。マサト＝シラガミです。」

「変な名前してんな。」

「異世界人ですから。」

「違いねえ。また、話が聞きたかったり、困ったことがあったらギルド来な。おれもあいつらも、皆、ハンターだからな。大体はそこにいる。」

「ありがとうございます。」

「すいませんが、そろそろ。」

騎士が、話を遮った。

「それじゃあ、また。」

「おう。じゃあな。」

互いに、別の方向に歩きだす。

一緒に歩いている騎士が、口を開いた。

「あの人たちは、あんなですがいい人たちですよ。私も何度か助けもらいました。」

「そうなんですか。」

「はい。それと、その囚人服は脱いでいただきます。」

「今度は、ほぼ全裸で王と会うのか。」

「懲りない人ですね。着替えていただくんですよ。」

「わかってますよ。」

ほんの、少しだけユーモアのセンスが成長した気がした。

僕のセリフ

「王に会う前にして頂くことが、2つあります。」

長くて、広い廊下を歩きながら、特務番外隊副隊長ロイター「ルア
「ジーニアスが言った。

牢屋の看守なんかしてたから、下っ端なのかと思いきや、意外に偉
かったようだ。

特務番外隊がいかなるものなのかは、良く分からないけど副隊長と
言うくらいだから偉いのだろう。

それに、話していると非常に聡明な印象を受ける。

まあ、名前に天才とかついてるしね。

「まず、シャワーを浴びて、用意した服に着替えてもらいます。」

まあ、そうだろう。自分自身でちよつと臭うな、と思っていたところだ。

というか、この世界シャワーあったんだ。

「そして、その後に役割の部屋に入って頂きます。」

役割の部屋？なんだそれ？

意味が分からず、立ち止まってしまった自分をよそに、副隊長さんはスタスタと歩いて行ってしまう。

「あの、ロイターさん！ちよつと待ってくださいよ。何ですか、

役割の部屋って?」

前を歩いていた副隊長が、歩調を緩めながら、こちらを向いた。少し小走りして、隣に並ぶ。

「ロイでいいですよ。」

そう言っただけで副隊長は、ロイさんから、今までと少し違う印象を受けた。

「そうですね。シャワーを浴びた後、着替えている最中にでも話しましょう。」

ロイさんは、またもとの歩調で歩きだした。

驚いたことに、この世界のシャワーは元の世界のものと、ほとんど変りなかった。

やはり、魔法は使われているようだったが、違和感なくとても快適だった。

脱衣所でロイさんが服を持って立っている。

いつのまにか、鎧の上から赤いマントを羽織っていた。

「これが騎士の正装なんですよ。」

こちらが質問するより前に、答えが返ってきた。

「役割の部屋の説明でしたね。」

ロイさんの説明によると、その「役割の部屋」とは異世界からの来訪者のための部屋であり、その部屋に入ること、魔力の覚醒やその属性の判明、さらにはこの世界に召喚された目的が知らされる。つまりは、この世界においての自分の役割を知る部屋。「役割の部屋」

そのまんま。

「まあ、通常は勇者として世界に希望をもたらすことが、召喚される異世界人の役割なのですが。」

人々に希望をもたらす＝魔王を倒す。ってことになるわけか。そしてその役割を全うしたものは、元の世界に帰ることができるらしい。

「しかし、あなたの場合は異例ですね。もうすでに勇者は存在してしまっている。」

そう、九条は勇者として迎え入れられたと聞いている。ならば、当然彼もその役割の部屋に入ったはずだ。

「正直、私は楽しみなんですよ。あなたにどんな役割が与えられるのか。もしかして、2人目の勇者なんてことになったら、すごいことですけど。」

部屋を出て、廊下に出る。

「さあ、いきましょうか。」

マントをなびかせ歩くロイさん。さつきよりも意気揚々としている。

「ここです。」

何回も角をまがり、ようやくたどり着いたその場所には。

「意外に普通なんですね。」

特に大きいわけでもなく、派手な装飾などもされてない鉄の扉があった。

「ここから、私は入れません。」

そう言つてロイさんが一步下がる。

なんとなく、心臓の音が近い気がする。緊張しているようだ。静かに息を吸い込み、そして吐く。

ちよつとだけ勢いをつけて、冷たい鉄の扉に手をかけた。

広がる真つ白な世界。期待を裏切らない王道な雰囲気。

「汝が力、目覚めの時なり。」

セオリー通り、頭に直接語りかけてくるような声。

力が流れ込んでくる？ いや、湧きあがってきてるのか。

「火、水、風、地、雷、光、闇。魔の力、これら7つのいずれかに属し、火に近きもの水から遠く、光に近きもの闇から遠し。汝の力、これらの如何なるものに属するものか。」

この属性の判明が終わったら、次は役割。喉が鳴るほど唾を飲む。

「つまり、主には魔力の属性も無ければ、この世界における役割も無いと？」

今、自分は王の御前にいる。

「はい。」

なんと言っていていかわからず、ただ返事だけした。

属性の判明をしようとしたところで、一向に声が語りかけてこなくなつた。

「…嘘。」

「へ？」

「うそお！無いよ。無い！属性無いよこの子。え？こんなことあるの？！いやでも…やっぱ無いよ。無い。ビックリだよ。ホント。」

ようやく喋りだしたかと思えば、さっきまでの厳粛な雰囲気はどこかへ吹き飛び、えらくその声はテンパっていた。
他人の頭の中で。

「あのお。無属性ってことですか？」

「無属性？無属性…そうだ！それでいこう。君…間違った。汝は無属性！」

「いや、もうなんか色々おかしいんですけど…まあいいです。それで、役割は何なんですか？」

「え？」

「いや、だからこの世界に召喚された目的は？」

「…」

「？」

「そんなものは、わかりません！」

そうして、物凄い力に押され鉄の扉から転がり出てきた。そのことを今、あらいざらい王に報告したところだ。

「信じられん…なんということだ。」

それは、こっちのセリフです。

僕の世話係

「なんにせよ決まりなのでな。主にはこれを渡しておく。」

王がそう言つと、使いの者が豪勢な台の上に乗った一冊の本を持ってきた。

「それは、記録の書と言われるものでな。別に特別なものではない。ごく一般的なもので、いわば自動的に記録されていく日記のようなものだ。なぜこれを今、主に渡すかというと、異世界からの来訪者が勇者となり、その役割を全うする時。その本が元の世界へ誘うとされているのだ。よつて、召喚されし者には必ずこれを渡すことになっている。」

その本には見覚えがあつた。

白くて何も書かれていない表紙。

間違いなく元の世界で見たあの本だつた。

やつぱり、この世界に来てしまったのは、図書室であの本を開いてしまったことが関係していそうだ。

「しかし…主には役割が与えられていない。よつて、その本が主にとって、どんなものになるかは分からぬが…その…まあ、なんかの役には立つであろう。」

…あれ？今、なんか投げやりになりませんでしたか？

「それともう一つ。実はこちらとしてもそう長くは、主にこの場所に居てもらつては困るのじゃ。申し訳ないがのう。大きな力を秘め

た異世界人をこの国が抱きこもうとしている。なんて他国に思われ
たら、大事なのでな。」

どうやら、異世界人とはこの世界で随分と影響を及ぼすものらしい。
本来なら勇者になる存在なのだから当然と言えば当然か。

それとも、ただの厄介払いの口実か？

「よって、一週間の猶予を与える。その間にこの世界に慣れ、基礎
的な武術や魔法を学ぶといい。ある程度の装備は主が旅立つときに
こちらで用意しよう。」

まあ、いきなり放り出されないとところをみると、この国は良心的な
ようだ。

「特務番外隊隊長！並びに同隊副隊長！主らに一週間。この哀れな
異世界人と行動を共にすることを命ずる。何かと面倒を見てやると
いい。」

…？今、さらつと他人のこと『哀れ』とか言いませんでした？

王の言葉が終ると同時に左右の両サイドに並んでいた騎士のうち1
人が立ち上がった。

並んでいる騎士たち。おそらくはそれぞれ隊長と呼ばれるものなの
だろう。

皆、鎧の上から白いマントを羽織っている。

予想でしかないが、おそらく隊長は白。副隊長はロイさんと同じ赤
のマントを羽織るのだろう。

自分の斜め後ろに居るロイさん以外には赤いマントの騎士は居な
かった。

もちろん。立ち上がった騎士も例外なく白いマントを羽織っていた。しかし、彼だけ周りと別の雰囲気を感じ出していた。それは、ロイさんにも感じていた違和感。

隊長と呼ばれた男には、その違和感が際立って顕れている。

そう。若いのだ。

おそらく30代から40代が主流の隊長格の中で、ロイさんはどう見ても20代前半。

そして隊長にいたっては、どう見ても10代。自分と同じ歳くらいなのだ。

そんなことを考えている間に、隊長は自分の隣に来て、大げさにマントをなびかせてから、片膝をつき顔を上げた。

「特務番外隊隊長、ギルバート＝ロンギヌス。王より与えられしその役目。果たすことを誓います。」

「特務番外隊というのは、いわば雑用係みたいなものなんですよ。」

王との謁見を終了させ、また広い廊下を歩いている。

「そういうこと。そして、今回晴れて『哀れな』異世界人の世話係を命じられたわけだ。」

隊長殿が自分の肩に手を置く。

「ギル。失礼ですよ。」

ロイさんが窘める

…あれ？ロイさん笑ってません？

「ゴメン、ゴメン。まあ、これから一週間よろしく頼むよ。歳も近いみたいだし、お互い気楽にやっていこうよ。俺のことはギルでいい。ロイのことも『さん』なんてつけずにロイでいい。」

そいった赤髪の青年の笑みは、やはりまだ幼さが残っているように見えた。

もしかしたら、年齢のせいだけではなく彼の気立ても関係しているのかもしれないが。

「あなたが言いますか、それを。まあでも、私としてもその方がいいですね。この話し方は誰に対してもそうなので、気にしないで普通に話してもらっていいですよ。」

深い緑の瞳が見えなくなるほど目を細め、優しく笑うサラサラの金髪の青年。

「でも、2人ともその若さで隊を任されるなんてすごいよな。」

そう言うと、ギルがまた笑う。

「だから、さつきも言ったろ。俺たちは雑用部隊。どの隊でも1人は居る厄介者を集めて1つの隊にしたのが俺たち。つまりは、厄介者？1と？2なんだよ。」

「ギルはまだしも、ロイはそんな印象ないないなあ。」

「その通り。一緒にされちゃ困ります。」

「言ってる。それより早いとこ休憩しよう。堅苦しい言葉遣いしてたから肩こっちゃまったよ。」

「そうですね。マサト。これから、あなたが寝泊まりする部屋に案内しますが、そこでお茶にしましょうか。」

「…牢獄じゃないよね？」

「違うよ。ちゃんとした部屋だって。てか、結構根に持ってるな。」

「あれは、完全にあなたが悪いです。」

なんやかんや話しながら、歩くのは楽しかった。

もうとづくに忘れてしまったような感覚。

他人に囲まれて過ごす感覚。

それが、ひどく幸せに感じる。

いつ以来だろうか。父さんと母さんが死ぬ前は、こんなことも少しはあった気がする。

「着きましたよ。」

ロイが1つの部屋の前で足を止めた。

「ここが、お前の部屋だぜ。」

そう言いながら、ギルが自分より先にドアを開けた。

人。人。ひと。ヒト。他人。ひと。

「よう。遅かったな隊長。おつ。そちらが異世界からのお客さんかい？」

「失礼なこと言うな。全裸特攻隊長だ。」

「バカ。何言ってるんだ！パンツは穿いたんだよ。全裸じゃねえ。」

「どつちでも一緒だよ。漢であることには変わりねえ。」

1人部屋にしてはかなり広いものの、その中にガタイの良い男たちが数10人。

「何先に始めてんだよ。ちゃんと隊長様を待てよな。」

「あんまり、騒いではいけませんよ。」

普通に溶け込んでいくギルとロイ。

―もうとっくに忘れてしまったような感覚―

―他人に囲まれて過ごす感覚―

―それが、ひどく幸せに感じる―

…いや、それにしただって人数多すぎじゃないですか。
お茶じゃなくて、完全に宴会でしょ。これ。

前言撤回します。

僕の理想

「しかし、あなたには本当に驚かされますよ。属性も無ければ役割も無い。拳句の果てには服も無い異世界人なんて。」

「前科はあるけどな。」

「ギル。うまいですね。」

全然うまくないです。というか、いい加減に、もうその話題から離れてほしい。

「服の話は余計だよ。ていうか、着てたんだって。服。でも、魔物との戦いで使っちゃったって。さっきも言ったでしょ。」

自分たち3人を残して、周りの騎士たちは酔いつぶれて寝てしまった。

あんまり飲んだこと無かったけど、どうやら酒は強いらしい。

「封印されていた魔物を倒したんでしょ？いくら力が弱まっていたとはいえ、よく倒せましたね。向こうの世界で武術か何かやっていたんですか？」

あの魔物を倒したことに武術はいっさい関係ない気もするが、質問に対して叔父の顔が浮かんだ。

「強くなりたいんだ。」

周りからの風当たりが強くなり、かなりの頻度でリンチをくらって

いた。

「何だ。いきなり。そんなブツサイクな顔して。」

真剣に話しかけたのに、叔父はキョトンとしていた。

「いや、こんな顔しているから言ってるんだろ。もう殴られるのはこりごりなんだよ。」

「強くなつてどうする？」

叔父の質問に今度はこっちがキョトンとしてしまった。

「どうするって…強くなれば返り討ちに出来るかもしれないし…それにいじめの的にならなくてすむかもしれないだろ。」

「それが、おまえが望むことか？」

「そうだよ。もう、親がいなくて弱いからなんて理由で殴られるなんてごめんだ。」

「世の中、理由があつて殴られることの方が少ないんじゃないか？」
「は？」

たまに、叔父さんの言っていることは難しすぎるものがあつた。

「正確にはいじめの対象がおまえである理由がない。と言つたほうがいいかな。」

「どういうことだよ？」

「だから、別におまえに親がいらないからとか、弱いからいじめられるんじゃないって言ってるのさ。」

意味がわからない。

「あの人。おまえのこと殴っている奴らなんて、別に誰でもいいんだよ。誰かを蔑むことで、自分の尊厳を確立するんだよ。つまり、踏み台にして自分の居場所をつくるんだ。皆必死なのさ、自分を守ることに。自分のことで、頭がいっぱいなんだよ。」

そんなの…

「そんなの最低じゃないか！」

そう言ったところで叔父さんの顔つきが変わった。

「最低？一丁前のこと言うじゃないか。自分のことすら守れずに、俺に泣きついてきてるくせに。何もせずにただウジウジしてるおまえの方がよっぽど最低さ。」

「でも、他人を貶めたりしてない！」

「さっき思いつきり他人のこと『最低』呼ばわりしてただろうに。」

「それは…」

もっと、言いたいことがあるはずだった。
でも、言い返せなかった。

「強くなったって、おまえが独りなのは変わらない。」

そう言った叔父さんの顔は、少し、ほんの少し寂しそうだった。

「なら、それでいい。それで、構わない。」

「ほう。何がいいんだ？」

「独りでも構わない。その代り、誰にも蔑ませない。そして、誰も蔑まない。」

「人である限り無理な話だ。」

「理想を持つくらい構わないだろ。人として。」

叔父さんが鼻で嗤う。

「ずいぶん味気のない理想だな。」

煙草の火を揉み消し、叔父さんが立ち上がる。

中学生の頃の自分には、その姿がひどく大きくみえた。

「おい、陰気少年。」

「なに？」

「おまえ…身体柔らかいか？」

「おい。マサト、マサト！」

ギルに呼ばれて、自分が思い出に耽っていたことに気づく。

「何…股さすってるんですか？」

「おまえ下ネタ多いのな。」

叔父さんとの柔軟体操を思い出したら、痛みがぶり返してきたような気がした。

あれは…拷問だよな…

「何の話だったっけ？」

ギルが呆れた顔をしている。

ロイは相変わらず見えているのか不思議に思うほど目を細め微笑んでいた。

「あなたが武術をやっていたかどうかの話ですよ。」

そうだった。それで、叔父さんのこと思い出したんだった。

「まあ、どうだろ…道場とかに通っていたわけじゃないけど、師匠みたいなのはいたよ。」

「そうですか。それは、明日が、楽しみですネ。」

「いいなあ。俺は仕事だもんなあ。」

「どうということ？」

何の事を言っているのか、さっぱりわからない。

「世話係の仕事として、明日は私があなたを戦闘訓練することになっています。教えておかなければならないことがありますので。」

「どんなこと？」

「それは、明日のお楽しみです。」

人差し指を立てながら、相変わらざる顔でロイが言った。

「あのさ…1つ聞いてもいい？」

「なんですか？」

ギルもこちらを向く。何となく自分の次の発言に注意が向いてしまった。

「股裂きとか…しないよね？」

「おまえホントに下ネタ多いのな。」

僕の訓練

戦闘訓練のために連れてこられた場所は床も天井も壁も真っ白だった。

高校の体育館ぐらいの広さ。

縦横無尽に駆け巡ることができそうだった。

「マサトは剣は使えますか？」

部屋を中心に来たところでロイが口を開いた。

剣。もちろん使ったことは無い。

それでも、叔父さんに武器も使えるようになりたいから、剣術を教えてくれと頼んだことがある。

両手に鉄パイプを持たされて、干した布団を永遠と叩き続けた。

2か月くらいで、断念したな。

よって、剣術の型などはいっさい知らない。

もしかしたら叔父さんも知らなかったのかもしれない。

「正直、自信ないな。まあ、振るくらいはできるんじゃないかな。」

「そうですか。まあ、いいでしょう。今日は剣術がメインじゃないですから。」

そう言つて、ロイが木剣を渡してきた。

「実戦形式の訓練なので持っていて下さい。実際の一般的な剣の重さにあります。まあ、異世界人のあなたには、あまり重くは感

じないでしょう。」

確かにある程度の重さは感じたが、鉄パイプ程じゃない。

「うん。大丈夫そうだよ。」

「なによりです。さて、それじゃ始めましょうか。」

「何をするの？」

「さっきも言った通り、実戦形式で訓練をします。心配しないで下さい。マサトが異世界人でも武術の心得があるにしても、後れをとるつもりはありません。」

「へえ、さすがは副隊長。自信たっぷりだね。」

多少、武術の心得がある以上、やはり強い相手と手合わせできるのは何とも言えない昂りを感じる。

「まあ、その理由もすぐにわかります。そして、それこそがこの訓練の目的でもあるんですよ。」

「それは、楽しみだ。」

「さあ、始めましょうか。」

お互いに、距離をとってから向かい合う。

「聞き忘れてたことがあるんだけど。」

「なんですか？」

距離をとったので、お互い少し声を大きめに話す。

「何でロイだけ鎧着てるの？」

「その理由もそのうちわかりますよ。」

正直、あまり納得はしていない。

まあ、しょうがないか。

ロイはいつも通り、目を細くしてニコニコしている。
それは、自分が構えても変わらなかった。

もしかして、ずっとあの顔のままなのかな…

「それじゃあ、マサト。一回だけ好きにさせてあげます。鎧を着ているとはいえ、兜はしていませんから、顔が狙い目ですよ。」

いつもの顔で、ロイが言う。
だいぶ、舐められているようだ。

「ロイ。自分で言うのも何なんだけど、身体能力も上がってるし、ただじゃ済まないよ?」

「私が大丈夫と言っているんです。遠慮しないでください。」

ロイの表情は崩れない。

あの、整った顔に一撃を喰らわせるのは気が引けるような気もするが、ロイがあそこまで言うのであれば何かあるのだろう。

「それじゃあ、遠慮なく。」

利き足で、地面を蹴りだし走り出す。
自分でも驚くほどのスピードがでる。
あっという間にロイの間合いに入った。

ロイは、相変わらず両手を下げたまま反応しない。

それとも、反応できてないのか？

「ロイ。ごめん！」

おもいつきりロイの顔に木剣を叩きつけた。

ロイの体が地面に叩きつけられワンバウンドして、跳ね上がる。

自分でやったこととはいえ、あまりの光景に動けなくなってしまう。
背中から、嫌な汗が出てくる。

襲ってくる焦燥感。

間違いなくやりすぎた。

「ロイ！」

やっと、声を出し駆け寄ろうとする。

「いやあ、驚きました。純粋な身体能力だけで、あのスピードにこの威力。さすがは、異世界人だけありますね。」

ロイは何事も無かったかのように、すくつと立ち上がった。
あっけにとられる自分を見て、相も変わらずニコニコしている。

「な…何で…？」

その言葉をやつのことで絞り出す。

「強化魔法。^{レジスト}」

「れじすと？」

「そうです。魔力を付加することで、自分自身や防具、武器に至る

まで、強度を高める魔法です。腰に剣を携えるものは皆この魔法を会得しています。」

「今の攻撃、全然効いてないの？」

「はい。威力によって吹き飛ばされたもののダメージは受けてません。その証拠に顔に痕さえ残ってないでしょ？マサトの魔力の付加されてない木剣では、レジストを使用している相手には効かないのですよ。」

確かにロイの顔にはかすり傷一つ無い。

「そして、これこそがこの訓練であなたに学んでもらいたいものなのです。わかってもらえましたか？」

「まあ…なんとなく。」

「なによりです。」

と言うや否やロイがいきなり懷に飛び込んできた。

早い。吹き飛ばしておいてなんだが、こんな重そうな鎧を着てこのスピード。

只者じゃない。

鋭く放たれた一撃を間一髪でかわす。
物凄い風切り音がした。

当たっていたかと思うとゾツとする。

「ビックリしたなあ…いきなり何すんだよ！」

「何って…訓練ですよ。理解したってさっきあなたも言ったじゃないですか？」

ロイの笑顔が段々怖くなってきた。

「いや、だから何でいきなり攻撃してくるのさ。」

そう言うと、ロイは少し呆れた態度を見せた。

「やっぱり、わかってないじゃないですか。訓練の目的はあなたがレジストを習得することです。」

「それはわかってるって…」

「つまり、私があなただを滅多打ちにして、あなたがそれに耐えて、めでたくレジストを習得しようとしてるわけじゃないですか。」

はい？何だって？

まるで、笑顔の面をつけているかのごとくロイの顔は変わらない。

「それでは。」

また突拍子もなくロイが仕掛けてくる。

「ちょっと待った。」

「待ちません。」

「普通はちよつとしたコツとかを先に教えるものだろ！？」

「最初からコツを教えてもらおうなんて、考えが甘いですよ。」

ロイの攻撃をかわしながら、抗議するが一向に聞き入れられない。そして、さつきからすでに感じてはいたことだが…

ロイのあの笑顔は危険だ…

今の自分にとってはロイの笑顔はすでに恐怖の対象でしかない。

「全く。避けないくださいよ。訓練にならないじゃないですか。」

いくらロイの攻撃が早いとはいえ、眼がよくなっている分だけなんとか対応できる。

それに、東洋の武術特有の緩急を付けた動きに、ロイが着いてこれていない。

その分、休みなく攻撃が続いてはいるが…

「冗談じゃない。一方的に蹴られる訓練なんて！というか、それなら何で木剣持たしたのさ。意味ないだろ。」

「私はアンフェアな状態で一方的に攻めるのは嫌いなんですよ。フェアな状態で一方的に攻める方が好きなんです。」

結局、一方的に攻めるんじゃないか！このサディストが！

「とんでもないサディストだな。」

さりげに出した言葉に反応して、ロイの攻撃がピタリと止まった。

「サディストってなんですか？」

この世界で自分の言葉が通じるのはレナが魔法をかけてくれたからだ。

おそらく、こっちが普通に話しているつもりでも自動的に通訳されているのだろう。

しかし、こっちの世界に概念のない言葉を発しても通訳できないようだ。

当たり前といえば、当たり前だけど。

そして、どうやら『サディスト』という概念はこの世界に無いらしい。

「サディストって言うのは、相手より優位な立場に常に立つことを好み、時には相手をいたぶることに精神的または性的な快感を感じる性質の人間のことを言うんだよ。Sとも言っね。」

うまく説明できたかわからないが大体の意味はこんなものだろう。

「なるほど。意味がわからないながら興味を引かれただけありますね。私のことです。それ。」

自分で認識できて何よりですね。

「さて、再開しましょう。」

また、攻撃を連続で放ってくるロイ。それを避ける自分。

「大丈夫ですよ。痛みには体と魔力が反応して、自然とコツが掴めるはずです。『魔道書読むなら、まずねずみを殺せ』って言うじゃないですか。」

「何それ！？ことわざ？それを言うなら『習うより慣れる』だろ。」

「あなたの世界ではそう言うのですか。単純明快ですね。ですが、少し味気ない気がします。やはり最初の方がしっくりきますね。」

味気ってというか…こっちの毒混じってるでしょ。てか、ねずみ可哀相だろ。

「まあ、そりゃ自分の世界のことわざの方が親しみがあるんだろう

けどさ。」

「確かにそれもありますが…」

また、ロイの攻撃が止まる。

「私、ねずみ嫌いなんですよね。」

…ねずみ…可哀相だろ。

僕の一撃

「いいか。ただ勢いをつけて殴るだけじゃダメなんだ。今から正しいやり方を教えてやる。」

始めて叔父が武術らしい技術を教えてくれたのは、股が180度を開くようになってからだった。

「相手の懐に飛び込む最後の一步で、左足が地面に埋まるほどおもいつきり踏み込め。おまえは右利きだからな。あと、少しオープンスタンス気味にな。それと同時に、左手も軽く肘が曲がる程度に出す。この時、左手が壁に触れているようなイメージを持て。」

叔父さんが実際にやって見せてくれる。正拳突きに近い構えだ。

「右足は後ろに残すようなイメージで、脇をしめ。親指が上にくるようにする。最初に勢いをつけた分、おまえの体には前に行こうとする力が働いている。その力の流れに上手く合わせるんだ。これは、センスが必要だな。その流れの中で、一番最初に動かすように意識するのは腰。後は肩、肘の関節を回しながら、やや斜め下気味に相手の鳩尾にぶち込む。」

叔父さんは勢いをつけずに止まった状態からだったのだが、放たれた拳の音はその威力を十分に物語っていた。

「ちなみに、相手を殴るといふより左手でイメージした壁を殴るつもりでいい。最初は相手との距離が近すぎるように感じるかもしれないが、慣れれば違和感もなくなる。」

自分でも真似してやってみる。なかなかしっくりこない。

「まあ、練習あるのみさ。ちゃんとマスターすれば止まった状態からでもかなりの威力をはつきするぞ。」

そう言うと、叔父さんはニコツと笑い、不意に懐に入ってきた。

なんか、冷たい。

「マサト。起きてください…」

誰かの声がする。

「起きてください。」

冷たい何かが、顔を覆い息が苦しくなる。

水？

「ぶほあ！」

咳きこみながら起き上る。

見上げればバケツを持ったロイが立っている。

どうやら気絶していたようだ。

そして、起すために水をぶっかけられたらしい。

かなり、ボコボコにされたからな。

途中から記憶がない。

業を煮やしたロイがスピードを上げてきて、5発ほど攻撃を喰らったのまでは覚えているのだが…

身体は5発では済まなかったことを自分に知らせている。

いったい何発殴られたんだ？

思い出せるのは笑顔で自分を殴るロイの顔。
その顔が先ほどの夢の叔父の顔と被る。

あの後、2日ぐらい飯食えなかったんだよね…

どうしてこうスパルタな人間ばかりなのだろう。
深く溜息をつく。

「途中から魔力が自然に反応しだしていましたよ。といってもまだまだですけどね。」

床に転がった木剣を拾い上げるロイ。

あれ？なんかその木剣…血が付いてませんか？ロイさん。

「どうしたんですか？マサト。」

「いや、なんかロイの持つてる木剣に血が付いてるような気がして…」

ロイは木剣をまじまじと見る。

「うん。いい感じですね。やっぱり血の出ない訓練なんて、訓練じゃないですから。」

ロイはいたく満足そうにしている。

どうやら間違っていたのは自分のようだ。

血が出たってことは、たぶん頭だよな。

そう思い、頭を触るが手に血は付かない。

あらためて見ると、痛みこそあるものの身体の傷口が塞がっている。

「ロイって、回復魔法も使えるんだね。」

血を拭いていたロイに話しかける。

「私はそんなもの使えませんよ。」

「へ？」

ロイの答えにキョトンとしてしまった。

「そろそろ、私の存在に気付いて欲しいんだけど…」

後ろから声がして振りかえると、そこには見たことのある金髪、青い瞳…レナがいた。

壁に寄りかかりながら、少し不満そうな表情をしている。腕を組んでいるせいで、豊満な胸がより強調されていた。

「レナ！なんか久しぶりだね…」

「何言ってるの。2日しかたってないでしょ。」

「いやあ。パンツ一丁でレナをおぶったのが懐かしいよ。」

「そうでしたね。ほぼ全裸のマサトが一時間以上ハアハアいいながらレナのことをおぶったんですね。」

「あんた達…わざと言ってるでしょ…？」

レナが溜息をつく。

「もう。ただでさえほかの巫女たちにかかわれたんだからね。勘弁してよ。まあ、私から言い出したことだからマサトが悪いわけじゃないけど。」

たぶん相当からかわれたのだろう。レナの顔が少し赤みを帯びている。

「まあ、何にせよありがと。傷治してくれたのってレナなんでしょ？」

「まあね。感謝してよホント。苦労したんだから。最初見たときは撲殺死体かと思ったもん。頭から血が噴水見たいに出てるし、左腕曲がっちゃいけない方向に曲がってたし。」

ロイの方を見ると、親指を立ててウイंकをしてきた。

なんてやつだ…

「でも、さすが巫女さんだね。回復魔法も使えるんだ。」

「巫女だったら誰でもできるわけじゃないですよ。」

ロイが会話に入ってくる。

レナの方を向くと、うんうんと頷いている。

「ひとえに巫女っていつでも色々あるの。医療部門や、裁判部門。それに秘書、清掃、情報整理、研究…まあ、その他もろもろって感じだね。」

裁判部門まで巫女が担っているのに驚く。

どうやら、この国での巫女はかなり影響力のあるものみたいだ。

「なるほどねえ。じゃあレナは医療部門なんだ。」

おそらく、魔法の使える程度や能力の高さ、適正なんかで決められるのだろう。

「ううん。私は清掃部門。」

.....

「何？その顔。」

「いや、別に...」

身体...大丈夫かな...

「あのね。前まで医療部門にいたの。今はちょっと違う部門に居るだけなの！」

レナが少し怒り口調に話す。

「左遷されたんですよ。奥さんのいる人にちょっかい出して。」

ロイが鎧を脱ぎながら、さらっと言う。

「違うから。なに妙にリアルな嘘ついてんの。」

なんだ。違ったのか...

「マサトも何でそんな顔してんの。」
「…すいません。」

レナはまた溜息をついて、ドアの方に向かっていく。

「もうおバカさんたちの相手はできません。私は帰ります。せいぜい頑張ってね。それじゃ。」

最後に少し呆れたように笑いながら、レナは出て行った。

「さて、それじゃあそろそろ再開しましょうか。」

ロイが木剣を手に取り軽く素振りを始める。

「え？もう終わりじゃないの？」

「何言ってるんすか。そんなわけないでしょ。」

「だって、ロイ…鎧脱いだし…」

「あなたが無駄に避けるから暑くなっただですよ。それにまだ必要なさそうですしね。」

ロイの態度が少し癪に障る。

しかし、実際マスターするにはまだ時間がかかりそうだった。

魔力が自分の体を覆うようなイメージで、ある程度ダメージを無くすところまではできるようになった。

しかし2、3発入れられてしまうと途端に魔力の覆いが消されてしまう。

後はボコボコにされる。

その繰り返し。

「一見完成しているようにも思えるんですがね…何で多少攻撃を受けると消えてしまうのか…原因が分からないですからね…」

ロイも不思議に思っているようだ。

「あと3秒で始めますよ。」

ロイが構えた。

急いで魔力を体から外に出しそれをうまく調整しながら自分の身体全体にはりめぐらしていく。

これがかなり集中力を必要とするので、攻撃を避けにくくなってしまふ。

ロイが風音と共に間合いを詰めてくる。

一発。

痛くない。

二発目。

痛くない。

三発目

痛くない…が魔力も同時にかき消されてしまったのがわかる。

ロイの四発目をなんとか避けて間合いをとる。

そして、もう一度魔力を外に放出させとうとする。

「実践じゃ、そんな紛い物をつくる余裕なんか与えてくれませんよ。」

そういつて、ロイが懷に飛び込んでくる。

鈍い痛みが脇腹に走り、足が浮く。

一メートルほど飛ばされ、床に落ちる。

なんとか受け身はとれた。

訓練でも待ってくれないじゃんか…

必死で息をしながら、片膝をつき痛みを堪えながらなんとか顔をあげる。

ロイが見下ろしながら口を開く。

「確かにあなたは強い。かなり武術にも長けているようだ。スピードもあるし私が当てるのに苦労するほど避けるし勘もいい。しかし、一発もらってしまったら、あとはどうすることもできない。しかも攻撃をしてもレジストが使えないせいで相手にダメージを負わせることができない。この世界でこの魔法が使えないのは致命的なんですよ。」

ロイが真剣に説明してくれる。

しかし、悪いが自分はこの訓練を一旦終了にさせたかった。

ロイの言いたいことはわかる。

だとしても…正直もう限界です。

いくら傷口を塞いだとはいえ、かなりダメージが残っている。

思うように身体が動かない…というより一部感覚がない。

そしてロイが説教垂れてる間に少し思いついたことがある。

レジストが使えないと攻撃も防御もままならない。

それは、わかっている。

しかし今自分はロイの攻撃を本当に僅かながら防ぐことができてい

それならば……

一発ぐらいロイにまともな攻撃を喰らわせることができるのではないだろうか…？

そして、その一発で仕留めれば…この訓練は一旦中止となるはず…

ロイが話している間にまた魔力を放出する。

しかし、今度は身体全体ではなく右腕のみに魔力を集中させる。

なんとか威力をあげられないものか…

そう思い外に放出した魔力とは別に身体の内部から右腕に魔力を送り、右腕の中が魔力で満たされるようにした。

これで、ちょっとはましになったろ…

あとは、ロイにこの右腕で一撃をお見舞いするだけ。

おそらくロイもレジストは使用しているが幸い鎧は脱いでいる。

「何をしているのですか？私の話聞いてますか？」

ロイがこちらの異変に気がついたようだ。

「実戦形式の訓練なんだろう？だったらこっちから攻撃してもいいんだよな。正直限界も近そうなんだね。」

「私を仕留めると…？ホントに話を聞いていなかったんですね。」

ロイの雰囲気少し変わる。

「さて、どうやって私に攻撃をしてくるのやら…楽しみですね。」

ロイは相変わらず微笑っている。

ただ…いつも細められているその目からは…

深緑の瞳が鈍く光っていた。

ロイの視線が身体に絡みつく。

今までにない威圧感に少したじろいでしまう。

しかし、ここまできたら引けない。

きつく木剣を握りしめ、呼吸を整えながらロイと距離をとる。

思い返せばこの訓練の最初の時と同じような状態になってしまった。

少し笑みがこぼれた。

ロイが訝しげな表情をしたのが、わかる。

最後に肺いっぱい吸い込み一気に走り出す。

ロイは微動だにしない。

さすがだ。

しかし、こちらもただ突っ込むだけじゃない。

木剣をロイの顔めがけて投げつけた。

もちろん木剣に魔力は付加されていない。
だから、当たってもロイはダメージを受けないはずだ。
それは、おそらくロイだってわかっている。

しかし。

人間はそんなに利口じゃない。

咄嗟に顔に飛んできたものは防いでしまうもの。

案の定ロイは自分の木剣で弾いた。

顔を防げば胴がから空きになる。

一気にロイの懷に飛び込んだ。

刹那の中、思い出すのはあの一撃。

- オープンスタンス気味に強く踏み込み -

- 左手は壁に触れるイメージで -

- 脇をしめ親指が上を向くように構える -

- 相手ではなくイメージした壁を打つように -

- やや斜め下気味に -

「鳩尾にぶち込む――」

鈍い音が空間全体に響く。

ロイの身体は微動だにしない。

「だから、言っただでしょう。」

鼻で嗤うようにロイが話し出す。

「意味がないんで……」

しかし、その言葉は吐血に遮られた。

白い床を真っ赤に染めながら、膝をつくロイ。

「なっ！バカな……」

立ち上がろうとするがその膝は脆く崩れ落ちる。

「これは……参りましたね……」

ロイの顔を見る。

今度はロイがこちらを見上げていた。

「血の出ない訓練なんて、訓練じゃないんだろ？」

僕の知識

「あなたには驚かされてばかりですよ。」

この台詞を聞くのは2度目だ。

今、自分とロイは医務室のベッドに寝かされている。

この世界でもこういう場所は白い天井だ。

「自分でもびつくりだよ。まさかあれで完成してたなんて。」

天井を見つめたまま話す。

正直横を向くのもつらい。ロイもおそらく上を向いたままだろう。完成したというのは強化魔法^{レジスト}のことだ。

どうやらいったん外に出した魔法を身に纏うのではなく、内部に魔力を満たし、あふれ出した魔力を制御したうえで形を整えるというものだったらしい。

つまり、自分がずっとやっていたのは外側を覆えていても中身はスカスカだったため、多少の攻撃で効果を消されてしまっていたというわけだ。

ロイに少しでもダメージを与えようとしたことが、いいほうに転んだ。

「でもさ、それならそうと最初から教えてくれたら良かったじゃないか。」

そうすれば、こんな大事にならなくてすんだのに。

「言っておきますけど、いったん外に放出した魔力を制御して自分

の身に纏うなんて器用なこと普通は出来ないですよ。あなたが身体に魔力を張り巡らした時点で、こっちは完成したのも同然だと考えたんです。ところが、あの様ですからね。こっちだって混乱しましたよ。」

そのわりには、楽しんでませんでしたか？

「まあ、いいじゃないですか。無事完成したわけだし。これで、あなたはそんじょそこの使い手には遅れをとることは無いでしょう。それに……」

ロイの言葉が止まる。

顔をロイの方に向けた。ロイは上を見たままだ。

「あの私に放った一撃……あれは何なのですか。いくらあなたが無意識にレジストを習得していたとはいえ、たった一撃であれほどのダメージを受けたことはありません。あの体が一気に重くなる感覚。それにそれだけじゃない。あなたの動きはこの世界のものとはまるで別物です。速かったり、遅かったり。受けるにしてもこちらの力を吸収してしまいそんな柔らかかな……いや、しなやか、と言うべきでしょうか。いくら異世界人とはいえこうも違うものなのですか？」

なんとなく分かっていたことだが、こちらの世界には日本特有の「柔」の技術が無い。

だから、ロイにしてみれば自分の動きはかなり奇怪なものに感じたに違いないだろう。

でも、ロイに放った一撃は特にそれとは関係ない。

ロイのダメージが大きかったのは単に鳩尾にクリーンヒットしたからだ。

「あの動きは元の世界でも独特のものなんだよ。知らなくて当然さ。でも、ロイが動けなくなっただのも当然だと思うよ。鳩尾に直撃したんだから。」

ロイがこつちを向く気配が無かったので、また自分も天井を見つめながら話すことにした。

向き直ってから、ロイから返事が返ってこない。

寝たのかな？

「鳩尾ってなんですか？」

不意にロイが言う。

最初意味がわからなかった。

そりゃ、鳩尾を知らない人だっているだろう。

だけど急所としてはあまりにも有名な場所だし、まして軍人であるロイが知らないと言うことなんて考えられない。

「いや、何って。鳩尾だよ。わからないの？」

まさか、訓練のときの「サディスト」のようにこの世界にはこの言葉の概念も無いのだろうか。

「知りませんね。教えてもらえますか。」

少し言い方が悪かったのかもしれない。

ロイの言葉尻がちよつとムツとしているように思えた。

「急所だよ。人間の。その場所を攻撃されると他の場所よりも身体

に対するダメージが大きくなるんだ。」

なるべく分かりやすいように説明したつもりだけど、伝わったのだろうか。

「急所ぐらいは私も知っていますが…」

ロイはあまり納得していないようだ。

鳩尾を知らないのであれば、急所も知らないかと思ったのだが、そうではないらしい。

「なら、鳩尾ぐらい知ってるんじゃないか？」

やっぱり、ロイが知らないだけじゃないのだろうか。

「急所と呼ばれる場所は…頭部と恥部しか知りません。」

ロイがはっきりと言い切る。

何だかよく分からないが少し悪いことをしたように思えた。

「あんた達。けが人なんだからおとなしくしてなよ。」

ドアを開けて、一人の女の人が入ってきた。

元の世界ではありえないような青髪。

小さい顔にショートカットが良く似合っている。

濃い茶色の瞳は少し気だるそうな雰囲気醸し出していた。

いや、気だるそうなのはこの人全体の雰囲気か…

おそらく、30代前半。

かなりの美人だが、そのオーラは気の弱い男には少し厳しいかもしれない。

美人なのに敬遠されるタイプ。

こちらの世界でも医者は白衣のようだが、かなりだらしく着ている。

「まったく、だらしないねえ。大の男が真っ昼間からこんなところで寝そべってて。しかもロイ。あんたいくら雑用部隊とはいえ、仮にも副隊長だろ。一発喰らっただけで、医務室送りとは情けない。」

ルデアさんと呼ばれるその人は、いすに腰掛けると、胸元のポケットからタバコを取り出し、ライターのようなもので、火をつけた。

この世界にもタバコあったんだ。

あまりに自然な仕草に気づくのが遅れる。

そつとう吸いなれている感じだ。

そういえば、叔父さんにもらったライターどうしたっけ？

「彼は異世界人ですよ。しかも全くの素人じゃない。それに、私の急所を攻撃してきたものですから。」

ロイにしては、棘のある言い方に聞こえた。

まさか、怒ってる？

そんなことを思っているとルデアさんがこちらに近寄ってきて、寝ている自分の額を叩いた。

「あんだねえ。いくら実戦形式の訓練だからって、股間は良くないよ。機能しなくなったらどうすんの。ふにやってなたらどうすんの。あんだ王宮の巫女達にまた袋叩きにされるよ。」

「いやっ、違う。違いますって・・・」

慌てて言い訳しようとしたが、ルデアさんはもう椅子に戻ってタバコをふかしている。

話を聞く気は無いようだ。

隣を見るとロイが笑いをこらえているのがわかった。

こいつわざとやりやがった。

楽しそうな色男を尻目に考える。

どうやらこの世界では急所と呼ばれる場所は、頭部と恥部しか知られて無いらしい。

ロイの言葉を借りれば。

むしろ、医学的知識いやもしかしたら、身体に対する知識が乏しいのかも。

なんでも魔法で治しちゃうからかな・・・

「それにしても黒髪の彼。あんだ私の前に誰かに回復魔法をかけられてるね。しかも相当腕のいい・・・」

ルデアさんがロイの方に目を向ける。

「レナ・・・かい。」

その言い方には何かいろんな感情が含まれている気がした。

ルデアさんの見せた表情は寂しそうでもあり、咎めるようでもあった。

そういえば、何故レナが医療部門から清掃部門に移動になったのか、正確な理由を聞いて無かった。

ロイがくだらないことを言っではぐらかしたのだ。

「私にもそれ、もらえませんか？」

ロイがルデアさんにタバコをせびっていた。

完全に話をはぐらかしている。

ルデアさんも諦めたようだ。

「貰いタバコなんてするもんじゃないよ。あんたそうやっていつも他人からタバコ貰ってるだろ。おかげで巫女達の喫煙者は増えるし、自分じゃ吸わないくせに、あんたのためにいつもタバコ持ち歩く奴までいるんだから。勘弁してくれよ。」

やっぱり、ロイは相当巫女達から人気があるようだ。

そして、この男はそれをいいように振り回してるらしい。

「まあ、その『金髪の悪魔』さんも股間打たれてウンウン唸ってるんだから、かたなしだねえ。」

ルデアさんは口に端をくいっと歪めて笑う。

ロイは相変わらず目を細くしているせいで表情が読めない。

「『金髪の悪魔』ってロイのこと？」

いわゆる二つ名と言うやつだろうか。

「そつだよ。王宮特務番外隊隊長『一本槍のギル』に副隊長『金髪の悪魔』といえば、泣く子も黙る使い手さ。」

ルデアさんは大きく煙を吐く。

「そんな大層なものじゃないですよ。私より強い人なんて五万とい
ます。この王宮にもね。」

ただ、私達は雑用が多い分市民との係わりも多いですから、噂が広
がり易いんです。」

「『一本槍』つてのはギルのこと？」

まあ、確かにあの男。名前にロンギヌスとかついてたしな。
間違いなく槍使いだとは思ってたけど、やっぱりそうだったのか。

「まあね。あの性格にはぴったりの二つ名だろ？」

ルデアさんはまた、口の端を歪ませて笑う。

もうちよつと違う笑い方をすれば男うけも良さそうなものだが。

まあ、これだけ若いのが副隊長。しかも隊長の方が若い。なんて部
隊はいい話題の種ということか。

そついえば、まだこの世界の仕組みについて詳しく聞いてなかった
ような気がする。

ちようと身体を休めている間に聞いておくのもいいかもしれない。

「なあ。ロイ。休んでる間にさ・・・。」

そついい始めた時にドアが勢い良く開く。

「元気にやってるかあい！」

レナだった。

あまりに普通に入ってきたので、正直もの凄い違和感が。

だって、さっきまでの会話の雰囲気じゃレナと医療部門には並々ならぬ因縁がありそうな感じじゃなかったっけ？
なにこの普通の感じ。

ルデアさんは心底呆れた顔をしている。

「あんだねえ。誰かに見つかったらどうすんの。」

どうやら、出入り禁止をあつさりレナが破っている状況のようだ。

というか、やっぱりダメなんじゃん。

「大丈夫だよ。ルデアさんしかいないの確認してきたし。それに気になっちゃって。マサト大丈夫？ていうかロイまで、寝てるの？」

レナは大きな目を丸くさせながらこちらを見ている。

「だらしないだろ。黒髪の彼にやられたんだと。急所に一発ぶち込まれたんだとさ。」

ルデアさんはタバコを灰皿で潰していた。

そんなルデアさんを見ると、レナが視界をふさぐ。

そして、自分の額を叩いた。

「もう。ダメじゃない。いくら自分がボコボコにされたからって、

頭から噴水みたいに血がでたからって、股間を攻撃しちゃだめだよ。訓練なんだから。機能しなくなったらどうするの？ふにやっとなったらどうするの？」

レナはわかりやすく頬を膨らませている。

・・・あなた達なんて嫌いです。

僕の本

これは、ある男の物語。

かつて、まだヴァルハイトが帝国でエルマーが王国だったころ。

両国の間で争いは絶えず、国も民も疲弊するばかりであった。

ところが、突然魔族の王を名乗るものが人間に宣戦布告。

人間達に異形の魔物が襲い掛かるようになった。

これに抵抗するために両国は停戦協定を結び、共に戦うことを約束する。

人間と魔族の総力戦が始まった。

戦争を繰り返してきていただけの事はある戦い慣れしていたためかなりの抵抗をみせるも、守ることで精一杯だった。

そんななか7人の強きものが現れ魔族の王を倒すべく動き出した。

様々な戦いの末7人は魔族の王、魔王にまで到達する。

7人の強さと魂の気高さに心打たれた魔王は人間への攻撃を停止することと共に二度と人間に戦争を仕掛けないと誓った。

こうして、平和は訪れた。ように思えた。

愚かなことにまた争いが起こった。

エルマー王国で軍事クーデターが発生。王族は王の一人息子を亡命させ、それ以外は皆殺しにあった。

混乱に乗じて、ヴァルハイト帝国は帝国となったエルマーに攻め入ろうとするが、戦いに嫌気の差した民衆は、亡命していたエルマーの王家の一人息子を担ぎ上げ革命を起こした。

こうして、エルマー王国は帝国となり、ヴァルハイト帝国は王国となった。

立て続けに起こる争いに、人々の心は荒み治安は悪くなる一方だった。

そこに一人の男が現れる。

奇怪な身なりや言葉。その男は異世界から来た者だった。

ずば抜けた魔力と戦闘能力、この世界には無い知識。

それらを用いてその男は世界を変え始める。

治安は安定しだし、各地にのさばっていた盗賊たちは討伐され、土地は整えられていった。

人々はその男をいつしか勇者と呼ぶようになっていった。

時はたち、人々の生活は安定していたようにも思えた。

かつて、いたとされていた勇者のことも人々は忘れかけていた。

しかし、魔王が7人との約束を破り、人間に再び戦線布告をしてきたのだ。

また、世界は争いに満たされていくことになった。

絶望の中、人々が望んだのは希望の象徴である勇者の再来だった。

月が落ちてきそうなほど、大きく空に浮かんでいた夜。

一筋の閃光と共に、再び異世界から男が現れた。

人々は勇者の再来だと喜び、男は期待に応えた。

勇者となった男は、優秀な使い手と共に魔王討伐への旅路に出る。

その数カ月後。魔物の数が激減し、勇者が魔王を封印したのだと、誰かが言った。

そして、魔王の封印が解かれるたびに異世界から勇者が召還されそれは幾度となく繰り返されてきた。

もう何人目の勇者か誰も数えられなくなってしまった今。

再び勇者として異世界から召還された男と共になぜか召還された男が一人。

魔力の属性を持たず、役割も持たない。

その名を白上雅人しろがみ まさとと言うその男。

これは、その男の物語。

白い本を閉じる。

王に謁見したときに渡されたこの本には、ほとんど伝説に近い歴史が長々と書かれていて、まるでおまけのように自分のことが書き記されていた。

自動で記録される日記みたいなもなだと聞いていたが、物語風で書き進めていかれるようだ。

元の世界で見た白い本は文章は幼稚だったし、歴史も途中までしか書かれていなかった。

「わからないことだらけだな。」

部屋の椅子に深く腰掛けながら独り言をつぶやく。

毎日の過酷な訓練と魔法の練習に追われて心身共に悲鳴をあげている。

タバコを加えて叔父さんから貰ったライターで火をつける。

この世界に来て、タバコを吸うようになってしまった。

レナが「拾ったのを渡し忘れていた」と言っテライターを自分に届けてくれたのはロイと仲良く医務室で寝ていたときの話。

コンコン、とドアをノックする音がした。

「よう、ギルだ。疲れてるとこ悪いが少し話があるんだよ。」

「入ってもいいですか？」

どうやら、ロイもいるらしい。

「どうぞ。」

短く返事をする。

「よう。」

「やあ。」

二人がそろって部屋に入ってきた。

「何をしていたんですか？」

ロイがいつもの顔で話しかけてくる。

「これを読んでたんだよ。」

白い本を持ってギルとロイに見せた。

「おお、そうか。そうなんだ。そっか。いやぁなんとというか。その、あれだな。あれだよ。」

ギルの様子が明らかにおかしい。

「一つきいていいか？」

椅子に座ったまま、見上げるようにロイに視線を向ける。

「なんですか？」

白い本からロイがこちらに視線を戻した。

「なんで、二人して完全武装しているんだい？」

ギルが下を向いてしまった。

ロイはまっすぐにこちらを見たままだ。

その目が開かれて深緑の瞳が顔をだす。

「今日の会議で正式に決定されたことなんですがね。」

ロイが淡々と話し出す。

「あなたを殺すことになりました。」

僕の就職先

「全く野蛮な人だ。いきなり攻撃してくるとは。」

物が散在している部屋の中、少し傾いた椅子に二人の男が自分の前に座っている。

「ロイが悪いんだろ。いきなり殺すなんて言うから。」

「まさか、言った瞬間に暴れだすとは思わなかったもので。」

部屋に舞う煙のような埃のようなものを訝しげに手で払っている。

「だけどさ、マサト。あれどうやったんだ？ほら、最初の魔法。」

ギルが突拍子もなく質問してきた。

「最初の魔法って？」

ロイが自分を殺すと言った直後に牽制として放った魔法のことだろうか。

「確かに、いくら魔力が強いとはいえ低級魔法しか習得していないあなたには、とても出せる威力では無かったですね。」

目眩ましのつもりで、火の魔法の中でも最も低級な火の玉をだし二人の直前でそこに風の魔法を送り込むことで急激に燃焼させ、小爆発を起こしたのだが。

それを、説明すると二人はかなりの動揺をみせた。

薄々感じていたことだが、この世界は科学の発展が全くといって

いほどない。

皆魔法は使えるが、その原理をあまり理解していない。

よって、火が燃えるには酸素を要することなんて知らないのかもしれない。

なんて、考えていたのだが二人の驚きは全く別のものだった。

「マサト。お前、2つの属性魔法が同時に使えるのか？」

話を聞くに、魔法使いには二つのタイプがある。

単属性のものと多属性のものだ。

ギルやロイは単属性。ギルは雷。ロイは風。といったふうである。それに対しレナのように水と光と地といった複数の属性を持つものを多属性というらしい。

お決まりのようだがこれら属性には優劣関係がそれぞれあり、簡単にいうとジャンケンみたいになっている。

火は風には強いが、水には弱いとかそういうものだ。

そして、その属性は強化魔法にも影響し優劣関係によっては、受けるダメージが半減したり、倍増したりというある。

と、ここまでですでに自分も魔法を習う上で聞いていたことだった。ちなみに自分は無属性。すべての魔法でみな同じようにダメージを受ける。

長所も短所も無い。非常に残念な状態。

では、多属性の者が圧倒的に有利かというとそうでもないらしい。

これは、知らなかったのだが多属性の者でもそう簡単にいろんな属性の魔法が出せないらしい。

つまり、火の魔法を使うとき自分は火の属性になり、同時にレジストも火属性になる。

もし、他の魔法を使おうとしてもどんなに熟練した魔法使いでも属性の変換を行うには10秒はかかるようだ。

つまり、違う属性の魔法を同時に出すことは出来ないということになる。

よって、多属性であつたとしても、一つの属性を極めるものの方が多いそうだ。

そこにきて、無属性の自分は何の魔法を使っているときも属性は無し。レジストも同様である。

その代わり、異なる属性の魔法を同時に出すことが出来るわけだ。

「無属性にこんな長所があつたとは、驚きですね。」

ロイはふむふむと、感心するようにうなずいている。

ちなみに、勇者の九条の属性を聞くと、光と火と雷といった。勇者三大属性が揃っているらしい。良いやつなんだが腹が立つ。

「話を元に戻すけど、何で殺されなきゃいけないんだ。」

壊れた窓から外を眺める。

城下といえ夜は静かだ。

そのかわりに空には星がこれでもかといわんばかりに輝いている。

「マサトにはある条件を呑んでもらわなきゃならない。それを拒否された場合俺達がマサトを始末しなければならなくなつたんだ。」

ギルがまっすぐこちらを見て話し出す。

「条件つて?」

呑まなければ殺されるような状態だ。ある程度のものなら快く受けよう。

「あなたには死んでもらわなければなりません。」

自分が行動を起こす前に、ギルがロイの頭を引つ叩いた。

これは、めずらしい光景だ。

「違うんだ。マサト。死ぬってというのは、書類上で死んでもらうって事なんだよ。」

ギルは早口で言い終える。

「ふざけるのはやめにして、まじめに話しましょうかね。まず、この世界においてあなたの役割が無いということはわかっていますよね？」

はたかれた頭を摩りながらロイが話し出す。

「ああ、わかってるよ。普通じゃないんだろ。」

役割の部屋の「声」も相当驚いていたしな。

「そうです。普通じゃないんですよ。あなたが思っている以上にね。」

ロイの瞳がこちらを見据えている。

正直吸い込まれそうだ。

「あなたは、異世界から召還されたものに必ず役割が与えられるのだと思っていませんか？違うんですよ。この世界に生きるものは、生まれつきすべての人間が役割をもつシステムになっているんです。」

王の息子は王。騎士の息子は騎士。金貸しの息子は金貸し。パン屋の息子はパン屋ってね。」

パン屋の息子が皆パン屋になったら、町はパン屋で溢れ返ってしまうのではないだろうか？

そのことをそのまま口にしてみた。

「鋭いですね。確かにそうです。だから、次男から下は皆、傭兵団というものに所属することになります。そこで能力に応じて様々な仕事をするわけです。」

ロイの話を聞くに傭兵団とは要は元の世界の警察のようなものらしい。

「じゃあ、女の子はどうするんだ？」

「女性はある一定の年齢まで自分の家で過ごしますが後に皆、巫女になります。」

そして、能力に応じて様々な仕事に就くわけか。

つまり、長男は家業を継ぎそれ以外は、男だったら傭兵に女だったら巫女になるってことか。

確かに、このシステムならすべての人間に役割があることになる。

「村人Aは死ぬまで村人Aってわけか、これじゃいよいよゲームの世界だな。」

壊れた窓から町を見た。

何故だかさつきと違うように見えてくる。

「何か言いましたか？」

「いや、じゃあ、役割を持たない人間は本当に一人もないんだな？」

「いえ、いくつか例外があります。まず自由都市ソドム。ここに一步入ればすべての人間は役割にとられず好きなことが出来ます。」

ロイが人差し指をたてる。

「自由都市っていうか、無法都市だけだね。」

ギルが口を挟んだ。

「まあ、それはおいておきましょう。次に盗賊などの犯罪者たちです。彼らはほとんどが傭兵団出身者ですが、自らの役割を捨てて生きる選択をしたわけですね。」

まあ、そういうやからがいてもおかしくわないだろう。

「そして、盗賊と似ているようで、似ていない。革命家達が居ます。これらは、今の役割制度に疑問を持ち各地でゲリラ戦などをおこなう傭兵団や我々騎士団と戦っています。正直かなりの規模なので、盗賊とは比較になりません。」

・・・まあ、そういうやからがいてもおかしくはないだろう。

「今あげた三つのうち、盗賊と革命家はすでに戸籍を捨てていて、書類上死んだことになっています。そして、もうひとつ盗賊でも革命家でもなく書類上は死んだことになっていて自由を得ている者たちがいます。これが、あなたに関係してくることです。」

ロイの話が架橋に入ってきたことがわかる。

「それは・・・」

「それは？」

一拍の間がひどく長く感じた。

「ハンターです。」

ハンター・・・どこかで聞いたことがあるような。

「あなたが牢屋に入れられていたときに一緒に入っていた人たちを覚えていますか？」

覚えている。陽気な人たちで、ジンとかいう男と知り合いになった。確かに彼らは自分のことをハンターだと言っていた。

「ハンターとは、傭兵団や騎士団が手の回らない仕事を引き受ける。要は何でも屋みたいなものです。仕事にはそれぞれの報奨金が定められており、ハンター達は自由に仕事を選んでいきます。」

「それは、いいとしてなんでハンターたちまで書類上死んだことにしなければならいんだ？」

「まず、そうしなければハンターを希望するものが増えてしまうということがあります。そして、もうひとつ傭兵団や我々が手に終えない仕事を負うわけです。それがどういことだかわかりますか？」

「つまり、きれいな仕事ばかりじゃないってことか。」

「その通りです。それ故にハンター達は他の人々から疎まれると共に畏れられています。彼らは、保険も年金も無い代わりに、自らのルールで生きています。国の法律は彼らの世界ではほぼ関係ありません。」

なるほど。自由の代わりに保障も無いか。

「それで、ハンターになればいいのかい？」

「そうです。最初から役割の無いあなたをどうするのか。国の出した決定は役割を捨てた者たちのところに入れることでした。」

まあ、勇者のお供とか言われなくて良かったか。

「わかったけどさ、ハンターについてもうちょっと資料とか無いのか？」

「そういわれると思って、こんなものを持ってきたんですよ。」

渡された本には、「金髪の勇者」という題名がついている。

「およそ200年前の勇者なんですが、問題の多い勇者だったようで、決まっていたお供の者達とは旅をせずにハンター達のなかに入っていたてしまい、しまいには腕利きにハンター達と魔王討伐に向かったらしいのです。」

何回も勇者をよんでると、とんでもないやつがたまにはあらわれるらしい。

「よって、その勇者の姿の正確な記録などは残っていないのですが、勇者がハンターについて述べている記述がその本に書かれていたんですよ。しかし、わたしたちには正直意味がわからなくてね。」

本にはご丁寧に栞が挟んであった。

「ちなみにその勇者。ほとんど記録が残ってないくせに、歴代最強

の勇者とか言われてるんだぜ。わけわかんないだろ。」

ギルの言葉は、耳には入っていた。でもそのまますり抜けてしまった。

何故なら、その勇者の残した記述があまりに衝撃的だったからだ。

ハンター。

彼らは自らの方で自らを律し。自らの美学で動く。なにものにも縛られず。豪快でいて厳かな者達。独自の礼儀を重んじる。

一般の人から疎まれ、嫌われ、しかしながら畏れられる。こっちの世界でいう、道を極める人にそっくりだ。

間違いなく、この勇者は日本人だ。

なんで、金髪なのはわからないが、おそらく染めていたのかもしれない。

そんなことはどうでもいい。

自分の頭から離れないのはこの記述。

「ハンターはこっちの世界でいう道を極める人。」

・・・死んでしまったお父さん。お母さん。

今まで育ててくれた叔父さん。

初めての就職先が決まりました。

極道です。

僕の街

袖を通すと、自然と自分の身体に合わせてサイズが伸縮する。

「便利なものだな。魔法っていうのは」

独り言を呟きながら鏡を見る。

そこに映るのは上下黒のスーツに白いシャツ、黒のネクタイを締め
た男。

靴もちろん黒。エナメルシューズのようなものだが、中に鉄か何
かが仕込まれている感じた。

「似合ってるじゃないですか」

本気ともそうで無いともとれるような言い方でロイが言った。

「それがハンターの制服になります。仕事をするときは必ずその服
装でいてもらいます。結構な優れものなんですよ、それ。耐久性も
鎧には劣りますがそこそこありますし、機能性は抜群ですしね。ど
うですか、着てみた感想は」

もう一度振り返って鏡を見てみる。まあ、悪くは無い。

「金のバッチが無くて良かったよ」

ロイはなんのことだというような顔をしたが深くは追求してこなか
った。

「さて、行きましようか」

ロイがそういつて歩き出す。

鎧をガシャガシャいわせて歩くロイ。それにうつとりする巫女たち。いつもの城の光景だ。

でも今日やつと自分はこの城から出ることになった。

限られた時間の中でロイとギルが必要な訓練を叩きこんでくれた。かなりスパルタだったがおかげで魔法も一通り使えるようになった。

門の前に着いたのは、歩き出してから20分後だった。

「本当に城つてのは無駄に広いな」

呆れるように振りかえる。遠くでそびえたつ城の天辺が見える。

そして前には馬鹿でかい門。この門が開くのかと思うと少しドキドキした。

「何やってるんですか。行きますよ」

ロイが大門の脇にある、人が一人通るのがやっとというような小さな門をくぐっていく。

まあ、そうだよな、と自分に言い聞かせて狭い門を通る。

狭い門の方がありがたいんだっけか…

元の世界の宗教の本にそんなことが書いてあったような気がした。

くぐり終えてもう一度振り返ってみたが、堀が高すぎて城は見えなかった。

「何だこれは」

返ってくる答えは予想していたそれでも聞かずにはいらなかった。

「バイクですよ」

ロイは平然と答える。

「あれ、おかしいですね。たしかあなたの世界から伝わったものだと思いますけど…」

少し不思議そうな顔をする。

それがバイクと呼べる代物ならの話だった。共通点は二輪ということだけ。

タイヤだけで腰くらいの大きさだったし、その厚さも二倍から三倍はありそうだ。

ボディもかなりいかつい。

見たかぎりではかなり前傾姿勢になりそうな感じた。

「これ、何を燃料に動くんだ」

まさか、これまで自分の魔力で動かすとかは言わないよな、と考えつつロイに聞いてみる。

「モンスターの血を精製したものですよ」

中途半端にリアルな答えが返ってきたので少し面食らった。そんな自分を他所にロイは淡々と何やら作業をしている。

「なかなかのものでしょ」

ロイは珍しく自慢げに聞いてきた。

「ああ、黒のリムジンだったらもっと最高だった」

よくわからなかったのだろう自分の言葉を見殺ししてロイは作業に戻る。

虚しくなるから極道ネタはこれからはやめようと思った。

「エンジンを掛けるときはこのメーターがMAXになるまで魔力を送り込みながらかけてください」

簡単に乗り方の説明を受ける。どうやら、これは貰えるらしい。

「さあ、もう行きましょう」

その言葉を皮切りに動き出す。

はつきりいつて鎧を着たままゴツイバイクに乗るロイは違和感たっぷりだったが、そんなことを思ったのもつかの間。自分の乗るこの鉄の暴れ馬を制御するのでいっぱいいっぱいになった。

ロイが止まったのは、町からも遠く離れた、ただっ広い荒野だった。

「着きました。ここですよ」

そう言ってロイが指差した先には、扉が一枚。建物とかそんなもの

は一切なく扉だけ。

煙草を取り出し、一服する。先に吸い終えたロイが扉を開ける。よく見ると、階段があり地下に繋がっているようだ。

狭く薄暗い中でよく響くロイの鎧の音を聞きながら、階段を降りていく。

降り切った先に、また扉があつた。

「この先が、これからあなたの街になります」

街。という言葉に疑問符が浮かんだが、喋る前にロイが扉を開いた。

一瞬言葉を失う。

そこは。そこはまさに街だった。地下特有のオレンジ色の光が街全体を彩っている。

気が遠くなるほど長い螺旋階段の下に広がるその街は上の世界よりもどこか静かで、それでいながらとてつもないパワーを秘めているようにも感じる。

全体的に上より建物が低いようにも感じる。しかしこの場所からみると隙間なく建物がたっているようにも見える。

その中を小さな人たちが行き来していた。

「なあ、ここに居る人たちって皆ハンターなんだよな」

階段を降りながらロイに聞く。

「ええ。そうですよ。なにか」

ロイは足を止めずに答えた。

「その割には色んな職業の人がいる感じなんだけど」

少なくとも1つの街が問題無く作られる程度には…

「別にハンターになったからと言って皆依頼をこなさなければなら
ないわけじゃありません。この世界、ハンターのルールに従って、
ハンターの街で好きな仕事をする分には誰も咎めないですよ」

なるほど。それならば自分も、と言いたところだが恐らくは無理
なのだろう。

なんとなくそんな気がした。

どれくらい時間がたったのか、やっとのことで階段を降り気きる。
上で見たときの印象よりずっと人が多い。

ロイは人の間をスルスルと抜けていく。正直見失いかけたときロイ
が止まった。

誰かと話している。

見覚えのある人物だった。

茶色の長髪に豊かな髭。牢屋であつたリーダー格の男。

彼はロイの後を追いかけてきた自分にも気がつく。

「おい。全裸の勇者。こつちだ。こつち」

大声で叫んでくれたおかげで周りの視線が痛い。

「その呼び方やめてくださいよ。ジンさん」

あらためてこの男のまえに立って思う。この人かなりの使い手だ。
前に会ったときにわからなかったのは、魔力を感じ取ることもでき
ない状態だったからか、それとも訓練をしてなかったからなのかも

しれないが、なんにせよ今はわかる。この人強い。

「何緊張してんだ。まあこんな世界に来たんだ無理もないけどな。まあよろしく頼むぜ。マサト」

自分の身体が強張っていたのを見抜いたのか、彼の豪快さの表れなのか大きな手で背中をバンバン叩かれた。
なんにせよ。痛い。むせた。

「これからハンター登録に行くんですよ」

ロイがジンに話を振る。

「そうか、暇だから俺も付いていこうかな。」

ジンは何の気なしに言った。

なんで？とは思ったものの口には出さない。怖いから。

ハンターズギルド。そう呼ばれる建物は街の奥に大きく鎮座していてまさに主要な機関であることを主張していた。

ここに来るまでにロイやジンは色んな人から話しかけられていた。皆さん強面だが、2人が自分を紹介すると口をそろえて「半裸の勇者か」といい歓迎してくれた。

正直、受け入れてもらえるなら何でもよかった。それぐらい皆さん強面だった。

中に入るとさらに薄暗い。

カウンターらしきところで煙草をふかしている白髪の男にロイが話しかけた。

しばらく話が続き、自分もそばに来るよう言われる。

白髪の男はゴンと呼ばれているらしく、ギルドを管理しているのはこの男だそうだ。

「半裸の勇者に会えるとは光栄だね」

あんたもかよ。とは思ったが、言ってる言葉のわりに柔らかさが無かったので少し緊張した。

「まあ、生きていけるように頑張んな。細かい決まり事なんかはこの二人に聞くといい。異世界人がどんなものなのか見せてもらうよ」

そう言うと言席を立てて裏に入って行ってしまった。

「良かったですね。気に入られたみたいで」

あれで、ですか。とてもそうは見えなかったけど…

「細かい手続きは済ませておきました。晴れてあなたも存在しない人間です。後は受け取るものだけ受け取って軽い説明会と行きましょう」

今なんかさらっと大事なことを言われた気がするが、気にしないようにした方がいいのだろうか…

それにしても受け取るものって何だ。

なんて、思っているうちにゴンが戻ってきた。

カウンターのうえに色々並べていく。その中の一際鈍い音を立てたそれに目を奪われる。

「あの、これって…」

それを指さしながらロイに尋ねる。

この街に来て強く感じていた極道の二文字。それがさらに克明になる。

「何って…銃ですよ」

この世界。銃もあつたんですか。

僕の仕事

「ランク？」

何となくは予想していたが、やはりハンターにも格付けがあるらしい。

ギルドにはお決まりの酒場で、ロイとジンに説明を受けていることだ。

「ええ。EランクからSランクまであります。ちなみにごく稀にそれ以上の称号であるマスターハンターと呼ばれる者もいますが今のあなたにはほとんど関係の無い話です」

「それで、そのランクに応じて依頼が受けられるわけだ。ランクが高ければ難しい依頼も受けられるってことだろ」

どこまでもお決まりって感じだな。

「違います」

ロイが間髪入れずに答えた。なんだかすいませんでした。

「確かにランクに応じて受けられる依頼が変わるのは事実ですが、難易度ではありません。報酬の高さです。依頼には二つのランクが付けられています。一つはマサトの想像通り難易度。もう一つは報酬額の高さです。難易度はいくら高くても誰でも受けることができます。しかし、ランクが低いと報酬額の高い依頼はうけられません」

なんとも世知辛い。しかし、それなら難易度のランクなんてつけなくてもいいのではないだろうか。

そう、思っているのがわかったのか、ロイが灰皿でまだ吸えそうな煙草を潰して説明する態勢に入った。

「難易度が設定されているのはハンターのランクを決めるためのものです。ランクは報酬額ではなく難易度によって随時上がっていきます」

なるほどそういうことか。自分のポケットから煙草を取り出して吸おうとすると、ロイの視線が刺さる。

自分がわざわざ煙草を潰したのだからもう少し質問して来い、といった感じた。

仕方が無いのでリクエストに応えることにした。

「それで、そのランクつてのを上げるのは結構大変なのかな」

ロイがよしよしといった感じで頷いた。

「Cランクまでいけば一人前ですね。実際そこまでいくのは今のあなたなら一切苦労しないレベルです。でもそこからはそこそこ大変ですかね。今はSランクのハンターは指で数えるほどじゃないですし、マスターに関してはもう歴史上の話になってますからね」

そこまで言う満足したのかロイは新しい煙草に火をつけた。

どうやら、上と下では実力にかなりの差がありそうだ。まあ、マスターハンターを目指すわけでもないし、そこまで気にする必要もなさそうだが。

煙草に火をつけようとして、また手を止める。

「そつえば、ジンってランクは何なの？」

自分の隣ですでに酔いつぶれて寝ているこのヒゲ。かなりの迫力を感じたはずだったが、今はただのおっさんだ。その姿が何となく叔父さんとダブる。

今頃何をしているのだろうか、自分がいなくなったことで困りはしていないとしても驚いたには違いない。でも、そういえば自分は今まで元の世界に帰りたいとか、そのために何かしようとか思わなかった。

普通、一般的に、真っ先にそれ考えるのではないだろうか。なぜ、そう思ったところで考えるのを辞めることにした。きつと、元の世界にろくな思い出が無いからだ。

「Sランクですよ」

ロイの発した音が耳に入る。でも考え事をしていたせいでそれを言葉として認識できなかった。

「ごめん。よく聞こえなかった」

無性に吸いたくなって煙草に手を置く。

「だから、Sランクですって」

隣のヒゲは気持ちよさそうに寝ていた。

「あと、言い忘れていたんですがこれからしばらく私はあなたに同行します」

ジンのことをまじまじと見つめる自分に向かってロイが話し出す。

「なんで……って聞くまでも無いか。サポートという名の監視ってこ

とだろ」

「物分かりが早くて結構。いくらあなたを歴史から消したとはいえ、今この国でもう一人の異世界人であるあなたを知らない者はいません。あなたかこちらに来てすぐに起こした事件のことですね」

「…なんかすいませんでした」

「あなたが、思っていることも確かに歴史上始めての珍事件でしたが、それと共に封印の魔物を魔法も使えないような状態で倒したことも広まっています。あなたは何やら運が良かったただけだと思いますが、世間はそうはいかない。国はまかり間違つて革命家たちに加われたりしたら厄介だと考えているのですよ」

「それで、副隊長様直々につてことが、ありがたいね」

「残念ですが、今扱っている要件が片付き次第ギルもあなたにつきます」

副隊長だけじゃなく隊長までか。自分に起きていることとして少し実感しづらいな。

「大丈夫なのか、隊は。上二人がいない状態で」

それは、もはや隊として機能しないのではないだろうか。

「大丈夫ですよ。皆ソロ活動が基本ですから」

そう言つて、ロイは二本目の煙草を潰した。

「それと、よさそうな依頼があつたので、受けてきました。村の近くに居付いている盗賊達を始末してほしいとのことです。最近急激に勢力を伸ばしてきた『火鼠』という盗賊団です。難易度はS。これでマサトもすぐにランクが上がりますよ」

またこの男は無茶なことを…

「いや、いきなりSは無理だろ戻してこいよ」

「駄目ですよ。依頼の破棄は死刑です。大丈夫ですよ、私も一緒に行きますから。というか2人までみたいなんですよ」

もう少し前にその話が聞きたかった。聞いていたところで状況が変わったかどうかはわからないが。というより、盗賊団潰すのに2人までって、無理が無いだろうか。いや、だからSランクなのか。

「でも、それだけ難易度が高ければ報酬もそれなりにいいんじゃないのか」

Eランクは最高でもDランクまでの報酬しか受けられない。ロイはハンターではないから受けた名義は自分のはずだ。

「それが、報酬がまたユニークで気に入ってしまったんですよ。まあ、Eランクなんですけど」

そう言つて、ロイが依頼用紙をこちらに渡した。Sランクの難易度にEランクの報酬という依頼が存在することに理不尽さを感じながら、報酬欄に目を通すと確かにユニークでロイが気に入るようなことが書いてあった。

アップルパイ食べ放題

僕の質問

黒い集団の中で自分だけ鎧なのは目立つから着替えてくる、と言ってロイがどこかへ行ってしまった。自分の隣には酔いつぶれているジンのみ。

なんだか、急に心細くなってくる。ロイのおかげでリラックスできていたことはわかってはいたことだが、強面の集団の中で実質1人にされるのはそのことを強く実感させた。

「隣、いいか」

何人かの男が近くにやってくる。それをかわきりにぞろぞろと黒い服の男たちが集まってきてしまった。

自分も黒服を着ているわけだが…威圧感で内臓が「こんにちは」しそうだ。

「ホントに、髪も眼も真っ黒だなあ」

まわりに観察されている。これが女性だったらどんなによかったとか。たとえばおばさんだったとしてもかまわない。少なくとも、顔に傷のあるおっさんたちにじろじろ見られるより百倍ましだ。

「大方の説明は受けたんだろ」

男たちの中の一人が話しかけてきた。会話をするつもりもあったよ。うだ。

「まあ、それなりには」

声が裏返ってしまいそうなのを必死でこらえて、なんとか言葉を絞り出す。

「まあ、そんなに緊張すんなよ。ハンターはハンターとは争わない。基本的にはだけどな。ただでさえ、外の世界のやつらから疎外されてんだ。身内で争うなんて勘弁だね。このルールさえ守れば誰もおまえさんをとって喰ったりはしない。だからしっかりロイから教わるんだな。そして破ってくれるなよ。そのときは俺たちがおまえさんを殺さなきゃならない。身内の始末は身内でつける。これが決まりなんだ」

こちらをリラックスさせるための半分、警告が半分。男が出している雰囲気は話された内容と同じものだった。

「頼むぜ兄ちゃん。異世界人と戦うなんざまっぴら御免だからよ」

別の男も話し出す。今度は矢継ぎ早に質問が飛んでくる。

名前は？歳は幾つだ？こつちの世界の感想は？向こうに女はいたのか？帰る方法はあるのか？役割も属性もないって本当か？Sランクの仕事をいきなり受けたのか？なんでジンと知り合いなのか？それらの質問に出来るだけ答えていく。もう少し他所者に厳しいイメージを持っていたがどうやらそうでもないらしい。

「背中に彫るもんは、何にするか決めたのかい」

一瞬の間。

空白の一人歩き。

聞かれたことが分からなくて。いや、わかりたくなくて。反応がで

きなかった。

しかし、この質問は大いに興味のあるものだったようで、自分の次の発言に注意が集まる。

「何のことですか…それ」

正直に、素直に答えた。知識的にも気持ち的にも。

それと同時に自分の期待外れの返答に対する、あからさまにがっかりした反応が返ってきた。

「なんだよ。ロイから聞いてないのか。俺たちハンターはこの黒いスーツ以外にもう一つのトレードマークがある。それは身体に自分の想うものを刻むのさ。基本的には背中だけだな」

そういつて男は上半身裸になり、背中をこちらに向けた。

筋肉隆々のキャンバスに描かれた、それ。

魔物か何かだろうか。

元の世界にはいない生き物だったが、口から血を滴らせながらその狂暴な目がこちらをみすえている。その迫力たるや見事なものだった。

そう、それはまさしく刺青。しかも、元の世界で若者に流行っていた、タトゥーとは違う。

その色づかいはまさしく「和彫り」そのものだった。

男たちは次々に服を脱いでこちらに背中を向ける。どれも圧巻だった。

獣が多いがそのデザインはどれも個性に満ち溢れているし、何かの紋章のようなものが鮮やかな色彩で描かれているものもあった。黒一色の陰影だけで女性の裸体が描かれているものもある。

どれも一様に芸術性が高い。

皆、自分の彫り物に誇りを持っているように見えた。どうしてそういう風習になったのかを知る者はいなかった。昔からそうだった。それが理由らしい。

元の世界での極道、または任侠と呼ばれる人たちが背中に彫り物をするのは、自分が俗世から逸脱したものだということを、覚悟を、背中に絵を刻み、その痛みに耐えることで表すからというのをきいたことがある。

どこまで正確なのかは分からないが、ここに居るハンターたちもいわば役割の決められた社会から外れた者たち。

もしかしたら、この彫り物の根本にあるものは変わらないのかもしれない。

「おい、それでどうするんだよ。おまえは何を彫るんだ」

見とれているだけの自分に痺れを切らしたように皆がせつついてくる。

「いや、すぐには決まらないですよ」

そう言うてはぐらかすしかあるまい。というより、いくら圧倒されたとはいえ嫌なんですけど…

皆も、まあすぐには決まらないよなと言って勝手に納得している。

なんとかこの場は凌げたようだ。と思っていたら、一人が白い長方形の紙を渡してきた。

「自分の頭の中に彫りたい絵を描いてその紙に魔力を込めてみる。

そうすればいい感じに絵が映し出される。それを彫り師のところに持っていけば背中に彫ってくれるぞ」

なんて迷惑な便利さだと思ったが、ありがたく受取って置くことにした。

話題を変えたいと思って何か質問を探す。

「そういえば、このハンターの制服って簡単に手に入るものなんですか」

突拍子もなく出された質問に男たちは、訝しげな顔をした。

「いや、そんな簡単には手に入らないぞ。ちゃんとハンターになる奴だけに与えられることになっていたはずだ」

どうしてそんなことを聞くのか聞き返してくることも無く答えてくれる。

「じゃあやつぱりロイは特別に貰ってくるってことだったのかな」

誰かに向って発した言葉ではなかったが、しっかりと口に出した。その言葉を拾ってくれた親切な説明係が一つ溜息をつく。

「おまえホントに何も聞いてないんだな。ロイは元ハンターだぞ。というか王宮特務番外隊は皆元ハンターなんだよ」

周りからも失笑が漏れる。

「元ハンターって、一度死んだことにされた人間が…そんな王宮に仕えるなんて仕事に就くことができるんですか」

確かに、隊長のギルや副隊長のロイをはじめ、特務番外隊は年齢層が異常に若かった。

なにか特別なだろうとは思っていたが、それにしても腑に落ちない。

「そんなふうに王宮の騎士になれてしまうのなら誰でもハンターになって、その後に騎士になろうとしてしまっくんじゃないですか。それじゃあ制度が台無しだ」

思った事をそのまま口に出してしまったのは、これまで思いもかけず親切にしてもらったせいかもしれない。
しかし、この言葉はよろしくなかった。

「わかったような口をきくんじゃねえ」

酔って寝ていたはずのジンが口を開いた。けして大声だったわけではない。

しかし、その口調には言いようのない重さが、いわゆるドスがきいていた。

その目つきはさっきまで自分の隣で寝ていた男のものではなかった。

とてつもない威圧感。

Sランクハンターの片鱗を垣間見せる。

「普通の一番から十二番隊までの人数は50人。それに対し特務番外隊は32人。何でこんな中途半端な人数になったと思う」

ジンではなく他の男が喋りだす。ジンは胸糞悪そうに舌鳴らしをし

てそつぽを向いてしまった。

答えを考える必要は無さそうだった。すでに自分が発言していい雰囲気ではない。

「2年前突如、ハンターたちの中から特別に騎士を選ぶ。そんな話が舞い込んできた。なんでも資格はハンターならそれでよし。人数制限も無い。能力があると判断されたものは、すべて採用。さらにハンター同士で戦わせることも無し。といった破格の条件だった」

予想通り男は自分の答えを待つことなく話し出す。内容は…いかにも胡散臭い。

「多くのハンターがこの話しに飛びついた。望んでハンターになったとしても、後悔しているやつは山ほどいるからな。ハンターの仕事は気持ちのいいものではない。国から認められているとはいえ、ほとんどが殺しだからな。それが盗賊であれ革命家であれ掟を犯した身内であれ、うんざりしてくるのもわかる。この時はそういう奴がいつも以上に多かった。最終的に8千人ぐらい集まったらしい」

残ったのが32人この人数の差が、ここにいる自分以外すべてから感じる後悔…悔恨の情の理由なのかもしれない。いずれにせよ最初に感じた胡散臭さが何だったのかわかればすべて明らかになりそうだ。

「俺たちは正直、騎士なんて興味無かったからよ。でも身内のことは心から応援してた。もしかしたら騎士になったってやることは変わらないのかもしれないが、それでもハンターよりはましなんだろうしな。快く送り出したさ。でも…」

男は話を続けようとするが、込み上げてくるものを抑えるので精一

杯でなかなか次の言葉が出せない。

「問題は、その採用するための試験の内容だったんだ」

別の男が代わりに話し出す。

「いや、あれは試験なんて呼べるものじゃなかった。」

その内容は…その内容は悲惨なものだった。

彼らに与えられたのはただ「生き残れ」というもののみ。それが採用条件だった。

彼らは戦争に利用された。

戦争といっても魔物とのだ。この世界では魔族は魔物を用いて人間を攻めることはないらしい。よって魔物たちは群れを持つことはあっても巨大な集団を築くことは基本的には無い。

しかし、稀に高い知能を持った魔物があらわれて低能な他の魔物たちを統率し、集団…いや軍隊を作り上げて人間を襲うことがあるらしいのだ。

300年に一度あるか無いかの本当に稀なケース。大陸の大平原に魔物たちは集結していた。

彼らは当初、意気揚々と戦地へ赴いて行った。その数が1万だと聞いたからだ。

一人が2匹倒せば十分すぎるくらいお釣りが出る。そんなふうに考えたかは知らないが、それでも楽勝ムードだった。

話が、そううまくいかないのは想像通りだ。

いざ、戦地に着いた時、彼らが目にしたのは、大平原の地と空を黒く塗りつぶしてしまいそうな大群。

あとでわかったことだが少なくとも20万はくだらなかったそうだと。彼らはすぐに引き返そうとした。話が違いすぎる。

しかし、それは許されなかった。退路を傭兵団と騎士隊の混合軍が塞ぎ、逃げようとする彼らに魔法の威嚇攻撃までしてきた。

彼らはそこで、国に謀られたこと、戦うしか無いことを悟った。

そう国は特務番外隊なんて作るつもりはなかった。

それを餌に魔物の大群を少しでも削るための犠牲となる駒が欲しかっただけだったのだ。

だが結局最後まで、傭兵団と騎士隊の混合軍は戦闘に加わることはなかった。

ハンターたちが全滅したところで、戦闘を開始することになった。

しかし、そのハンターが、あろうことが20万という圧倒的な数の差を乗り越え魔物の大群を全滅させてしまったのだ。

大地を埋め尽くす死骸の中、立っていたのが今の特務番外隊の32人。

そのなかでも魔人のごとき働きをしたのが、「一本槍のギル」と「金髪の悪魔」のロイ。

そのふたりが半数以上を倒したなんて噂も広まったらしい。

血まみれの顔で国王に向って

「依頼は果たしました。報酬はちゃんといただけるのでしょうか」

と言った、ロイの笑顔は今でも王宮の語り草だそうだと。

ジンやその他のハンターたちが悔やんでいるのは、自分たちがその場所にいなかったこと。

実際上級のハンターたちのほとんどは参加していなく、頭一つ抜けていたのはギルとロイだけだったそうだ。

ジンは特に自分が行っていれば、他のハンターもあれほど死なずに済んだと後悔し国を恨み、宥めるのに大変だったらしい。

それが、話の大体の内容だった。

重たい空気の中皆が一斉に煙草の火をつけた。

「それにしても、凄いんですね。ギルとロイって」

自分でも的外れなことを言ったと思う。

「といってもそれ以外になんて言っていないのか、わからなかったのだ。」

「ギルは生まれながらの天才。ロイは…血筋か」

誰かがそんなことをボソツと口にする。

「血筋？」

その言葉が妙にひっかった。

「ロイは元々一番隊隊長の役割の家柄ジーニアス家の長男。まともについてれば次期一番隊隊長つてとこだったんだが、いきなり自分の役割を捨ててハンターになって、そうかと思えばまた騎士になつてやがる。よくわかんない奴さ」

でも、おかげであの時の奴らも報われるってもんだけだな。

そう付け足した男の口調に、うそはないようだった。

確かに、ロイがいなければ国の思惑通り特務番外隊は存在しなかっただろう。

「あんまり、人のことべらべら喋らないでください。趣味わるいですよ」

後ろの方でロイが煙草を吹かしながらたたずんでいる。いつ、戻ってきていたのだろうか。

いつもと変わらぬ笑顔。

きつと血まみれで国王の前に立っていた時も…

「明後日に出発します。いいですね」

黒いスーツは鎧よりも似合っている気がした。

「アップルパイ。食べに行きますよ」

僕のやる気

「ここが、依頼が出された村です」

バイクで5時間以上、距離は…はつきりいつてわからない。とにかく遠かった。

寂れている。それが第一印象。真昼間だというのに活気が全く感じられなかった。

「二年前まで有名な鍛冶屋がいたので栄えていたらしいのですが、その鍛冶屋が盗賊に殺されてしまつて以来、町は衰退の一途をたどっているみたいですね」

バイクに寄りかかりながら煙草をふかしているロイ。

立場を捨てハンターになり、その立場を別の形で、しかも命がけで手に入れなおした男。

もしかしたら、いや、ほぼ間違いなく自分は「とんでもない男」と行動を共にしているのだろう。

この男を理解することはできるのだろうか。

それをロイは望んでいるのだろうか。

すべては、そのへばりついた笑顔の中か…

そんなことを考えながら、自分も煙草に火をつけようと思ひ風よけに身体を前に屈める。

「うつ…」

背中に走る刺激に小さいうめき声をあげてしまった。

「まだ痛みますか？まあすぐに治まりますよ。後で傷薬でも貰って塗りましょう」

根負けして彫ることになった刺青。何を彫るかは…あまり悩まなかった。

もし彫ることになったとしたら、「これ」にしようと早い段階で決めていたのだ。

絵を入れたのは昨日の話なので、背中はまだ熱をもっているし、痛みもかなりある。

しかし、依頼がそれなりに急ぎのようだし、そんなことを言ってもしょうがないということで今ここに居るのだ。

「ここですね。依頼主の家は」

ロイがノックしようとした手を一旦止めて、こちらを振り返る。

「言い忘れていましたが、依頼主は14歳の少女。そして…殺された鍛冶屋の一人娘です」

「それ、言い忘れるようなことなのか。忘れないだろ普通」

ロイは返事を返す前にドアをノックする。

「細かいことを気にする男は嫌われますよ。特に年頃の女の子にはね」

しばらく待ってみたが応答がない。何回か繰り返して見たが、耳に

響くのは風の音のみ。

ここは風が強い。

「留守みたいですネ」

さて、どうしたものかと依頼用紙を見つめるロイ。

「近所の人に話を聞きに行ってみるか。どこに居るのか分かるかもしれないし、盗賊のことも色々聞けるかも」

ロイが依頼用紙を折りたたみ、ポケットにしまう。

「期待はできませんね。基本的に皆ハンターとは関わり合いたくないでしょうから。おそらくはまともに取り合ってくれないでしょう」

「この村を救いに来たのにか」

ロイは大袈裟に首を振り、肩をすくめた。

「村を救いに来たんじゃないやありません。盗賊を殺しに来たんです」

何の違いがあるのか。

そう思ってもおかしくなかった。

でも、それに大きな違いがあることを、なんとなくだが感じていた。

「じゃあ村長の所にいかないか。依頼のことを話せば会わざるを得ないだろ」

「それが、妥当ですかね。気になることもありますし、村長にあっておくのは賛成です」

「まさか、あの依頼を受ける人がいたなんて…」

絶句に等しいくらい苦しそうに絞り出した言葉。

客用のボロボロのソファ―は座っていると変な態勢になってしまう。

「まず、お伺いしたい。あの盗賊達を、『火鼠』をあなたたち二人だけで倒すことができるのですか。奴らは急速に力をつけ、傭兵団も今では関わりたがらないほどの奴らですよ」

正気の沙汰じゃないという村長。おおいに同意する自分。

「傭兵団が面倒事に関わらないのはこれに限った事ではないでしょう。低級の魔物を倒して治安を守っているふりをしているだけですから」

ロイは姿勢を見事に保ちながら優雅にコーヒーを啜る。最初見たときは色の濃い紅茶なのかと思ったが、顔色一つ変えずに飲むとはさすがだ。

「…恐れているのは報復ですか」

そう言つて、煙草に火をつけようとしたロイを、ここは禁煙だと言つて奥さんが止めた。

この世界にも禁煙があつたのか。いや、煙草があるのだから当然と言えば当然か。

「当たり前です。個人的な契約でもあつちはそうは思ってくれませんが。あなた達が失敗すればまず間違いなく恐ろしい報復が待っているでしょう」

なぜだろう。言っていることは至極当然のことに思えるのに、腑に落ちない気がした。

いや、というより…嘘をつかれた感じがした。

「それは無いんじゃないですか。いや、無いことを知っているのではないですか」

自分の感じたことは間違いでは無かったのだと思った。その確信を得る糸が紡がれていく。

「そもそもこんな村に、なぜ盗賊達は執着しているのでしょうか。最初こそ鍛冶で栄えたこの村に目をつけたのも納得できる。しかし有名な鍛冶職人が死んでしまった今、この村は金や物資を集めるにはあまりにも寂れている。おそらく盗賊達はもう、どこか他の所にそういう供給源を持っているに違いない。では何故なのか。そうこの村にはもつと他のもの、金や物資では無い他のものを得るために干渉を受けている。そのために生かされている。だから些細なことでは滅ぼされない。違いますか」

ロイは淀みなく言葉を並べた。

彼の「気になること」とはこれのことだったのだろう。今わかった。そして、盗賊達が求めるもの、それはおそらく依頼主の少女に関係している。

「こんにちは」

長い沈黙を破ったのは、村長でも奥さんでもなく、一階の玄関からの声だった。

「これが、私のお父さんとお母さん」

写真に写っていたのは十人に聞けば十人が色男だと言う美男と、百人に聞けば百人が別嬪だと言う美女。

目の前の少女も、例に漏れずその美しさを受け継いでいる。未完成な美しさと、微かに残るあどけなさは、その年齢特有のあやうい魅力を醸し出していた。

確かに盗賊団のボスが虜になるのも頷けなくはない。

『これは…もう少しすればかなりの上物になるな。2年後の誕生日におまえをむかえにくるからな』

そう言い残して去っていったという。…ロリコン野郎。

「最初はここの村のお金と、お父さんの武器が目的だったみたい。でもボスがお母さんに目をつけて、攫って行っちゃったの。他にも若い女の人たちが連れ去られたわ。でもお父さん以外誰も盗賊と戦おうとはしなかった。傭兵団も敵わない相手と戦えるはずないって」

一人で暮らすには広すぎるリビング。掃除をするのも容易ではないはずだ。

それでもこの家は小奇麗にされている。村長の家の方がよっぽど汚かった。

「そんなにジロジロ見ないでよ。何もないでしょ」

きよろきよろする自分に、サラが言う。

サラ。

それが彼女の名前。

旧約聖書に出てくる絶世の美人と同じ名前だ。

関係無いけど。

テーブルの上にアップルパイと紅茶が出される。ロイはすぐに紅茶に手を伸ばした。

「安心しましたよ。今度は本物の紅茶だ」

一口飲んで、満足そうに、そして嫌味っぽく言うロイ。

サラも意味がわかったらしく、笑顔を見せる。やはり幼さは彼女の中に多分に残っている気がした。

「ビックリするくらい薄いよね。あそこのコーヒー。あれじゃ色の付いたお湯だもん」

むしろその方が、味が無くてまだ良かったかもしれない。

「サラはアップルパイ食べないの。というか仕事終わってないんだけど食べてもいいのかな」

自分とロイの分しか無いのを見て、尋ねてみる。

「ダイエット中なの」

「…その必要があるようには見えないけど」

「あなた…マサトだっけ。女性にもてないでしょ」

どうして、そんなことを言われなければならないのだろう。

当たっているだけにほんのり悔しい。

「痩せる必要が無い女性が『ダイエット中』って答えたときは他の理由があるの。それぐらいは汲み取ってほしいな。それに女性に『太っている』っていうのはすごく失礼なことだけど、案に『君は痩せている』って言うのも十分に失礼なことだと思うよ」

言われていることはわかったが、それならば自分は何と言えば正解だったのかはわからなかった。

「それに、細かいことを気にする男も駄目です」

そう言ったロイは、すでにアップルパイに手をつけていた。

「本当においしいですね。この村でこんなにおいしいものが食べられるとは思っていませんでした。リンゴの酸味とカスタードのバランズが絶妙だし、パイ生地もサクツとしていて最高です」

「ありがとう。まあ一応商売にしてるからね」

サラはロイとの話に花を咲かし始めた。

素晴らしい模範回答が自分の隣に居たようだ。

「週に一回皆の家にアップルパイを作って持っていくの。それを買

ってもらって私は生活しているんだ。これは商売道具だから…だから私は食べないの」

サラの顔に年齢にそぐわない翳りがかかり始める。

「16になったら巫女になれるからいいけど、それまでは自分で生活していかなきゃいけない。お父さんもお母さんもないから。でもさ、どんなに美味しく作ってたって、いい加減飽きると思わない？でも皆、買ってくれるの。きっと私のアップルパイを食いたいと思っている人なんてこの村にはもう一人もないのに。…でも、皆、買ってくれるの。私をちゃんと成長させなきゃいけないから、盗賊のボスにちゃんと売らなきゃいけないから。それさえ済めばこの村は盗賊の恐怖から解放されるから」

少女は唇を固くかみしめる。でも…それでも泣いてはいなかった。

「生きるために、私はアップルパイを売るのが。媚を売るのが。自尊心を売るのが。お父さんのおかげで栄えていたこの村の人たちに。そのお父さんを見殺しにして、助けようとしなかった村の人たちに。私のことを売ろうとしている人たちに」

サラがきつく握っているカップの中には、もう何も入っていないかった。

『あの子がいなければ、さっさとこの村は滅ぼされていたかもしれない。かつてこの村のために働き、この村のためにただ一人戦った男の一人娘。その子を買って、生贄にして、我々は生きようとしている』

帰り際に村長が呻くようにした懺悔は、清々しいほどに胸糞悪かつ

た。

「そうならないために…来たんだ。サラが無事に巫女になれるように。サラのアップルパイを食べに。盗賊を殺しに来た。ハンターは一度受けた依頼は破棄できない。そんなことをすれば契約違反で他のハンターに殺される。だからこの依頼も命がけで果たさなければならぬ。それが例え誰も関わりたがらないほどに力を持った盗賊『火鼠』だったとしても…そうだったよな。ロイ」

あの空っぽのカップが満たされるほどに、彼女はきつと涙を流したに違いない。

一人には広すぎるこの家の中で、泣声を響かせていたのだ。

タイムリミットの彼女の誕生日は二週間後に迫っていた。

両親の死体にすぎた少女に、変態盗賊は残酷な猶予を与える。

屈辱的な時間を少女は必死に生き、僅かな希望を持って、「忌み嫌われる者たち」に望みを託すことを願う。

すずめの涙ほどの報酬に同意する男が二人。

「望み」はもちろん、この村を救うことではない。彼女を救うこと、それもまた違う。

それは少女の代わりに、少女の悲しみの、怒りの、憎悪の業火で汚い小動物を蹴り殺すこと…

「金髪の悪魔と異世界人のルーキー。この二人でなら、十分に可能です。あなたの希望どおり彼らを殲滅します。それに…」

ロイが久しぶりに深緑の瞳を覗かせた。

「ねずみ…嫌いなんですよ、私」

煙草をふかすロイ。

サラは優しい笑みを浮かべた。

「前言撤回するわ。マサト、あなたきつと女性から好かれる。それからロイ。許可なく煙草を吸う男はあまりいい顔はされないわ」

僕の不安

通学路にあるその大きな枝垂れ桜の木が好きだった。一般的な桜よりもさらに優美で、艶っぱいかんじがするからだと思う。

学校からの帰り道、その桜を見上げていくことが毎日の習慣だった。

ただ、その日だけはいつも通りでは無かった。

それは、あまりにも、そう、恐ろしくなるほどに美しい光景だった。

五月だと言うのに、空が思い出したかのように雪を降らしたのだ。降雪地帯として有名なその場所にとって、「五月の雪」そのものはさして珍しいことではない。

しかし、全体的に冬が早く終わり、すでに桜が満開になっているというのに雪が降るということは初めての経験だった。

燃えるように咲き誇る桜の木の周りをはらはらと、雪が舞っていく。

通常ならば、けして交わることのないものの融合に、その美しさに、自分は目も心も思考回路もすべて奪われていた。

身体が震えた。

怖かった。

その美しさは神々しくもあり、どこか狂気じみているようにも思えた。

あの時の感情を「畏れ」という言葉で表せることを知るのは、もつと後のことだ。

その触れることの許されないような神域に、一羽の鳥が飛んできた。

「雅人君」。まさと――」

不意に自分と呼ぶ声。

その声に連れられて家に戻ると、父と母の突然の死を知らされた。

「アップルパイは、歩きながら食べられる。そこが良い」

ロイが手に持っているアップルパイを見つめながら言う。

「アップルパイはデザートなのに意外に腹にたまる。そこが良い」

同じように手に持つアップルパイを見つめながら、自分の番をやり過ごす。

「ねえ。さつきから何してるの？」

サラは少しむくれながらこつちを振り返った。今、サラの父親が残した武器がまだいくらか残っているというので、見せてもらいに離れの倉庫まで行こうとしている。

ちなみに、ロイと自分がやっているのはアップルパイの良い所を順番にあげていって、感謝を深めながらおいしく食べようという素晴らしいゲームだ。

「アップルパイの良い所を言っていて、おいしく食べようっていうことさ」

「もちろん、そんなことしなくてもおいしいですが、さらにおいしくできたら素敵じゃないですか」

本当にサラのアップルパイはおいしい。

最初は喜んで食べていた。

それでも一日に三回。4日も食べればいくらなんでも飽きる。他の食べ物、サラが食べる分以外は無いそうだ。

「ふうん。そのわりには二人ともさっきから全然食べてない気がするけど」

そう言いながらサラはバターロールを口に運ぶ。

「味わって食べているんですよ」

ロイはサラのバターロールをじっと見つめている。

案内された倉庫には、思った以上に武器がたくさんあった。

正直ほとんど盗賊に奪われたのではないかと思っていたのでかなり意外だった。

「盗賊達によく奪われずにこれほどの武器がよく残ってますね」

ロイが素直に疑問を口にする。

「これでもかなり少なくなったのよ。目ぼしいものはほとんど取られちゃった。でもお父さんの武器は扱いが難しいものが多かったから、そのせいもあるのかもしれない。残っているものもそこらへんのととは比べ物にならないくらいの上物よ。まあ、つかえればの話だけど……でも金髪の悪魔さんと異世界人のマサトなら何かあるかもねというかまだアップルパイもってるの？」

何か言い訳をしようと思いロイの顔を見たが、ロイはそのつもりはないようだった。

「『黒龍の片翼』はやはり取られてしまったのですか」

なんともいかにもな名前。ザ・ファンタジーの世界といった感じだ。

「『黒龍の片翼』って？」

自分が質問し、ロイが説明する。この役割分担を実はお互い意外に気に入っている。

「彼女の父親が残した名作中の名作。身の丈ほどの大きさ、石をも割る頑丈さと切れ味。そうであるにも関わらず、まるで羽のように軽い。先程も彼女が言っていました。扱いにくい武器を多くつくるなかで、この大剣だけは例え素人でも持つだけで、万力を手に入れると言われていました。まあ大方、盗賊の頭が持っているのですよ」

もし、本当にそんな代物ならそいつはとんでもない物なのではないだろうか。

それが腕利きの盗賊の手に渡ったとなれば尚更だ。

サラはひとつの武器の前にじっと立っている。サラに隠れてそれが

どんな武器なのか見えないが、何か思い入れでもあるのだろうか、ただそこに立っているだけなのか。

ただ、無性にその見えない武器が気になった。

「勝てるの？」

サラがくるりとこちらを振り返って言った。

短い言葉。その中に秘められた多くの意味。全部汲み取るのは、少し難しい。

どう答えたものかと思いロイに目を向ける…

ロイは持っていたアップルパイを丸々口に詰め込んでリスのように頬を膨らませながら、ムシャムシャと口を動かしている最中だった。啞然とそれを見つめている間に、ロイはゴクリと音を立ててそれを呑み込んだ。

「もう、報酬を先に頂いています」

指に付いたクリームを舐めながらロイが答えた。

短い言葉。その中に秘められている意味は…決して多くは無い。だが、わかりやすかった。

「そつか。そうだね。前払いだからしっかりと働いてもらわないとね」

うんうん、と頷きながらサラは言う。

サラは微笑んでいた。まるで不安を噛み殺すように、呑み込むように。いくら気丈に振舞ってはいても怖いのだろう。

当然だ。盗賊が怖くない少女なんているわけがない。

——恐怖を認めることだ——

不意に叔父さんの言葉を思い出す。

「恐怖。焦り。不安。そういうものに対応するために、するべきことは落ち着こうとすることじゃない。気持ちを静めるようとすればするほど、余計に深みにはまる。まず、するべきなのは認めることだ。自分がビビってるってな。自分がどうしようものなくパニックってるって自覚を持つんだよ。それに立ち向かうんじゃないくて、受け入れる。そうすれば地に足がつく。不思議と克服できるぞ」

目の前にいる少女は恐怖に立ち向かっている。それをやめさせようとは思わなかった。

彼女がそれを乗り越える必要なんてない。自分たちが、盗賊を倒せばいい。

そう倒せば…

認めなければならぬのだろう…

ここにきて、自分が脅えていることに。恐怖していることに。

人を殺すことに。

それはこの世界に来ていつしか覚悟をしていたはずのことだった。殺さなければ殺されるのは自分。だからやらなければならない。頭ではわかっている。

しかし、まだこの恐怖を、不安を、うまく受け入れることができて

いなかった。

「どうしたの？マサト。というかいつまでアップルパイ持ってるつもり？」

サラの言葉に思考を遮られる。この場合は遮ってもらって助かったのだろう。

手に持っていたアップルパイをロイと同じように口に詰め込んだ。

「なんでそう仇のように食べるかなあ。まあいいけど」

むくれているサラの機嫌をとろうかとも思ったが、ロイが我、関せずといったかんじで煙草をふかしながら武器鑑賞に浸っているので、自分もそうすることにした。

少し前から気になっていたサラの後ろに隠れている武器が見える所に行く。

引き寄せられたと言っても良いくらいにそれが気になっていたのだが、その理由はすぐにわかった。

この世界の武器は皆、基本的に大きい。ロイによると魔物と戦うためには小さい武器では致命傷を負わせるのが難しいかららしい。唯一の例外と言えば銃があるが、元の世界の鉛玉をぶっ放すものではなく、魔力を圧縮し発射するもののように、威力は使う人間次第と、いうかなり不安定なものだ。

ただ、この武器は明らかに他のものより小さい…というより元の世界の基準のものだ。

いや、問題は大きさなどでは無い。

それは…

それはまさしく「刀」だった。

しかも鍔も装飾もない。白鞘の反りの少ない直刀。いわゆる任侠映画などによく出てくるもので、サラシを巻いた詰めのおっさんが持っている、あれ。こういうのは脇差っていうんだっけか…いやちよつと長い気がするから長脇差かな？

認めなければならぬのだろう…

テンパっている。

えっと…自分が焦っていることをまず受け入れる云々等々…
おじさんの名言も台無しだ。

「これは…その、これもお父さんが造った物なの？」

少し硬くなった気がした首を動かしてサラの方を向いた。
ああ、これね。といったかんじでサラが話す。

「これはお父さんの唯一の駄作と呼ばれてるものよ」

「駄作？」

「うん。まずちっちゃいのに、普通の武器の二倍くらい重い。今は大きくて軽い物を作るのが主流だから。まるで真逆なんだよね。まあその分『黒龍の片翼』より頑丈なんだってお父さんが言ってた」
「じゃあ、その頑丈さが売りになるんじゃないのか？大きくて軽い物が主流なら脆い物も多いだろうし」

なにも唯一の『駄作』とまで呼ばれるほどでは、ないのではないだろうか。

「まあ、そうなんだよね。お父さんの売りは武器の頑丈さだったか

ら。でも…」

「でも？」

正直な話。この武器を使いたいと思っていた。

かつての勇者が極道に似ていると言った世界に入って、手に入れる武器が拳銃と長脇差なんて何かの縁があると思えなかったからだ。

おそらく異世界人の自分なら重さも、さほど問題ではないはず。

「これ、剣が鞘から抜けないんだよね。」

認めなければならぬだろう…

自分がテンパっていることを。

僕の興奮

「なんで、選んだんですか？それ。」

肩慣らしに実戦稽古をしようということになった。

「なんで…だろうね。」

抜くことのできない刀。これではただの重たいだけの木刀だ。

「あなたの世界の、あなたの国の特有のもので親近感を覚えたのはわかりますが、剣なんですよ、それ。細いし、短いし、重いし、それ以前に切れないし。良い所ないじゃないですか。」

「でも、丈夫らしいぞ。」

ロイは大袈裟に肩をすぼめる。

「まあ、あなたがいいなら、いいですけどね。」

「名前がわからないといけないんだって」

サラはこの刀を抜く方法はそれしかないと言われたらしい。実際鞘の部分を壊そうとしたり色々としたそうだが、結局、功を奏さなかったらしい。

— だけど、お父さん。そいつには名前が『無い』って。それが、『名前』なんだって—

名前を呼ばなければならないのに、名前が無い。まるで、なぜなぞだ。

だけど、自分はこの刀をもらうことにした。運命的なものを感じたから、自分ならこの刀を抜くことができる気がしたから。

理由をあげようと思えば、いくらでも作れる。

これならば、殺さずに済むのではないか。それが、本音。

そんな、淡い希望を抱いた。きっと甘いだろう。それもわかっている。

だから…その一方で切り札も用意している。

『殺すため』の。

こういうのは二律背反っていうんだっけ。違った気もする。

「さて、始めましょうか。」

ロイが、大きな、それは大きな両刃の斧を出した。刃の部分だけで、ロイの太ももまである。

こんな物でも異空間にしまっただけで手軽に持ち歩ける便利グッズがあるというのだから、本当に魔法は便利だ。

「今日は真剣ですから、気をつけてくださいね。わたしはもともと斧使いですから、木剣を使っていたわたしとの感覚でいると大怪我しますよ。」

「大丈夫だよ。わかってる。」

刀を持つ手に力を込める。

「名無し」それが、自分が勝手につけたこの長脇差の名前。

当然こちらが勝手に付けた名前を呼んだところで、この刀が応えるほど、ご都合主義的な事はない。

そういうことは『勇者』のまわりで起こること。

勇者か…九条は今、何をしているのだろう…

「ねえ。あなた達は何をするために此处へ来たのかしら。」

サラは椅子に座り、年齢に似合わない艶っぽい脚を組んでいる。

「盗賊を倒す、依頼を果たすためです。」

ロイはサラの顔を見上げながら、しれつと答えた。

「そうよね。そうなのよ。それで、そんな状態ってことは命を懸けてわたしの依頼を果たしてきたって考えていいのかしら。」

「いや、これは、ちよつと稽古が白熱しちゃって。」

自分の前で、正座する二人の男をこの少女はどう見ているのだろう。女性に蔑まれることに快感を覚える変態がいると聞くが、もしかし

たら少し、その扉を開いてしまったかもしれない。

「『ちょっと』のわりには、随分ビリビリのボロボロに見えるけど。」

「ああ、これなら大丈夫ですよ。ハンターの制服の代えは持つてきていますので。」

「女の言葉の中にある意味を汲み取れない男は嫌いよ。」

サラが脚を組み直す。真面目に話を聞きたいが、集中できそうにはなかった。

「大丈夫だよ。もう盗賊団の拠点もしっかりつかんでるし、後はしつかり作戦を立てるだけさ。」

その拠点に毎日続々と、ガラの悪そうな連中が集まっている。どうやら、他の場所で活動していた奴らも戻ってきているらしい。

むさくるしい男が200人ほど。盛大にこの美少女を迎えるようだ。

本当に女一人のためにご苦勞な事だ。

定期的に盗賊の下っ端が、サラの様子を確認しに来ている。なぜか遠巻きに。

悪党らしく、堂々と村に入ってきてても良さそうなものだが、どちらにせよサラがハンターを二人ほど雇ったことはあちらにも知られてるだろう。

「もう、いい。わたし疲れたから寝るね。稽古でもなんでもお好きにどうぞ。」

椅子から立ち上がるとサラは自分の部屋に入っていつてしまった。ピンクのネグリジェの天使はご機嫌斜めのままご就寝のようだ。

「どうして女性は説教が好きなんでしょうね。足が痺れましたよ。」

ロイはゆっくりと脚をくずしながら、溜息をつく。

「美人に説教されるのも悪くないと思うけど。足さえ痺れなければね。」

「残念ながら気持ちが悪くありませんね。冷めた目で上から見下ろされるより、下から潤んだ目で上目遣いされる方がいいに決まっています。」

まあ、感性の違いだからしょうがない。みんな違ってみんな良い。昔の人は良いことを言うものだ。

「外に一服しに行きましょう。」

家の中では全面的に禁煙にされているので、煙草が吸いたかったら外で吸うしかない。

それも仕方のないことだ。

自分だって、元の世界にいたときは叔父さんが煙草を吸うのを毛嫌いしていた。

「月がきれいですね。」

ロイが白煙を吐き出しながら言った。

一瞬、愛の告白をされたのかと思ったが、この世界には、名前のない猫の小説を書いた文豪はいなかったはずだ。

「ああ、『金髪の悪魔』が出そうだな。」

サラから教えてもらった、この世界では有名なわらべ歌。

月が大きくでているそんな夜は

金髪のあいつに気をつける

暗闇と一緒にやってくる

風の吹かないそんな日は

こわい、あの悪魔に気をつける

涼しい顔してやってくる

金髪のあいつがやってくる

おそろしい悪魔がやってくる

金髪の悪魔がやってくる

わらべ歌というものは往々にしておどろおどろしいものが多い気がするが、この歌もなかかのものだ。

「まあ、確かに今はわたしが『金髪の悪魔』ということになってますが、その歌はわたしが子どものころにすでにありましたよ。おそらくもつと昔にその歌のモデルがいたんでしょう。」

そうだとすると、今この男以上にこの異名がふさわしいものもいないだろう。

「どうです？心の準備はできましたか。」

少しの沈黙の後、ロイが口を開いた。気づいているのだろう。自分が人を殺すことを恐れていることに。随分と優しい悪魔もいたものだ。

殺す相手は、最近ちまたを騒がす盗賊団。『火鼠』

容赦なく町や村を焼き、ねずみのように女と食料を食い散らかし、そしてまるでシンボルのように糞尿を撒き散らしていく。

やらなければならないのだ。これから生きていくために。

「まあ、なんの得にもならない仕事ですが、さくつと終わらせましょう。ねずみ退治をね。」

独り言のように呟いた、ロイの言葉で思い出す。

何の得にもならないようなことに命を懸けられる。それが極道だと。

強きを挫き弱きを助ける。それが任侠だと。

そう誰かが言っていた。

そうなのだとしたら、これから自分がやろうとしていることは、まさに『なのかもしれない。』

結構は明後日の夜。

サラの誕生日、三日前。

「まあ、確かに年端もいかない女の子に欲情するおっさんなんて見逃せないからな。」

この胸にひろがるざわめきが、口から洩れる白煙と一緒に出ていつてくれたら、どんなにいいだろう。

「さっき、その少女の脚に興奮していたくせによく言いますよ。」

欲望を理性で制御することができかどうかは、人として重要な境界線だと思う。

しかし、殺意というものは意外と心の中の浅い所にいるのかもしれない…。そうも思う。

僕のミス

なぜこんなことになった。

どうしてこんなことに…

ついさっきまで、ほんの数分前まで、盗賊達と向かい合っていたというのに…

今は、バイクのエンジンが焼き切れるほどのスピードで盗賊団の拠点に背を向けて走っている。

例えこの混乱を自分自身のなかで受け入れたとしても、落ち着くことはできないだろう。

いや、むしろそんな必要はない。今は焦らなければならない。

—早く、村に戻らなければ—

「たった二人で俺達を相手にしようなんぞ、頭がおかしいのか？今日は大事な日なんだ。見逃してやるからさっさと帰りな。」

アジトの門の前で見張りが数人。鼻で嗤っている。まともに取り合うつもりはないようだ。

それは、そうだ。まさか自分だってわざわざ正面から乗り込むとは思わなかった。

「確かに頭がおかしいかもしれませんがねえ。なんたってこっちはア

ツプルパイのために、これから人を200人ほど殺そうとしているんですから。そうですね、例えばあなたの首をこの建物の中に放り投げれば、もう少しちゃんとした人間が出てくるのでしょうか？」

ロイの顔はいつもどおり。これから、女を口説くのかというほどの爽やかな笑顔。

それにたいし、相手はみるみるうちに逆上の色がでてきている。

「おい、兄ちゃん。おまえここが、どこかわかっていつてんのか？ここはな、世間で怖れられている盗賊団『火鼠』のアジ―」

男がこちらに一步にじりよってきたところで、その男はもう別のものになっていた。

首が無くなればそれはもう、人ではない。

目の前に飛び込んできた光景。鮮血の噴水。

覚悟はあったものの、それでも身体は反応する。胃液が逆流して、酸味と苦さが口に広がる。間違いなく小便も少し漏れた。

「そちらこそ、こちらの言っていることを理解していますか？わたしたちはあなた達を皆殺しにする依頼を受けたハンターです。その相手に迂闊に近づくななんて脳味噌沸いているんですか？」

突然振り抜かれた大斧の片刃に血が滴っている。

ロイの顔は相変わらず、そう血しぶきがついている以外は。

「このやろつ。やりやがったな。てめえ死ぬ覚悟はできてんだろつな。」

きつと、男は武器を構えようとしたのだ。でも、武器を持つための腕はもう、地面に落ちていた。闇夜に響く、苦痛の叫び。

「こいつ。あんな馬鹿でかい斧をなんて速さで使いやがる。それに、後ろの奴も微動だにしねえ。油断ならねえぞ。」

動かないんじゃない、動けないんだ。目の前に広がる惨状に足がすくんでしまっている。

「あなた達のような雑魚も、そして、もちろん盗賊団『火鼠』の頭の命もいただきにまいりました。相手が何人かなんて興味はありません。わたしはねずみが嫌いなんです。」

ロイの瞳が顔を覗かせる。これから、いつきに畳みかけるつもりだ。身体が震える。『名無し』を握る手に力が入りすぎて腕が一本の棒のようだ。

こんな状態で戦えるのか。本当に今、これから目の前にいるこの男たちを自分が殺すのか。

「本当に今宵は月がきれいですね。」

その言葉を聞いた途端。盗賊達の顔色が一層青くなる。騒ぎを聞きつけて、そろそろと出てき始めていた者たちの足音が突然止まった。

「おい、『月がきれいですね』だと…まさか、おまえ。」

仲間を殺された怒りの空気が急速にしぼんでいくのがわかる。

そのかわりに驚愕と動揺が場を支配しはじめた。

「金髪に深緑の瞳。馬鹿でかい斧。これから葬る者への手向けの言葉。…まさかあんだ。」

「なんで、こんなところに、こんな場所に、『金髪の悪魔』がいるんだ。特務番外隊で騎士をやってるんじゃないのか。なんで、ハンターの格好なんかしているんだよ。」

少しずつ後退しながら、武器を構える男たち。その数はすでに30人近い。

「聞いたことがあるぞ。金髪の悪魔は勇者と一緒に来た、『もう一人の異世界人』のお目付け役になったって。」

「じゃあ、後ろで、さっきから固まってる薄気味悪い黒髪は、まさかその『異世界人』だっていうのか。」

「『異世界人』に『金髪の悪魔』か。なるほど、それならたった二人で俺たちと戦うしようってのも、ありうる話だ。」

「おい、中にいる奴を全員呼べ。頭と幹部のいないときに、潰されたんじゃ話にならねえぞ。」

口々に話す中から聞こえてきた言葉に、胸にズシン、とくるものがあった。

頭と幹部がない…？

そつえば、さっき今日が大事な日だとか言っていたのを思い出す。嫌な予感が体を駆け巡る。まるで全身の血が鉛になったみたいだ。

「頭と幹部がない？ということですか。」

ロイも怪訝に思ったようだ。それに、同じように何か不穏なものを感じている。珍しく語気が荒い。

突然、叫ぶような笑い声が響き渡った。

ロイに腕を切り落とされた男だ。意識があつたのか。

「おまえら、つまりあれだろ。頭のお気に入りのあの小娘に雇われたってことだろ。それで、のこのことこんなところまで来たわけだ。大方俺たちが集まるのを待っていたんだろうが、ちよつとばかり遅すぎたな。頭と幹部が村に迎えにいったぜ。今ごろあの娘、頭にやりたい放題されてんじゃねえのか。」

泣き笑いのような声を上げながら男は虚ろな目でこちらを見ている。腕を落されておかしくなった男の姿も十分に寒気のあるものだったが、それよりも話された内容がいっそう血の気を引かす。わかるのは『これ』が得体の知れない不安の正体。

どういうことだ……サラの誕生日は三日後のはずだ。

そう思ったはずだった。しかし、どうやら口に出してしまっていたらしい。

「小娘の誕生日なんて知らねえよ。馬鹿なのか。今日はな、我らが『火鼠』の頭の誕生日なんだよ。その捧げものが、あの小娘ってわけさ。何を勘違いしていたのかは知らないが、おまえらは小娘が叫んで、苦しんで、よがってる時にこんなところに突っ立ってるってことだよ。」

男はまた嗤おうとした、のだろう。胴から真つ二つになった今となつては、どうでもいいことだ。

ロイは切り伏せた死体に一瞥もくれずに、構えをつくる。

「マサト、戻ってください。二人で戻ろうとすれば後ろから攻撃されます。ここはわたしにまかせてください。あなたは、村に戻ってサラを助けなさい。」

ロイはこちらを向かない。だからどんな顔をしているのかわからない。

でも、知っている。自分が今まで動かなかったのではなく動けなかったことを。

それでも、さっきまで一向に動かなかった体が動く気がした。人の死をみる恐怖より、サラを守れないかもしれない焦燥が体を動かさうとしているのか。

「はやく行きなさい。」

ロイの怒鳴り声とともにバイクに向ってもつれる足で走り出した。

泣いていた。

どうして、『誕生日』がサラのものだと、疑わなかったのだろう。サラ自身もそう思っていたから……いや、よくよく考えれば気づくことができたはずだ。

ありえない体験をして、ありえない魔法の存在を知って、だからといってすべてのことを鵜呑みにしていいわけではないのに。

考えること、疑うことは『元の世界』で最も重要なことだったじゃないか。

なぜ、それを怠った。

なぜ、こちらの世界の人間と同じ感性で、感覚で物を考えようとした。

なぜ、なぜ、なぜ…

後悔と自分に対する言いようのない怒りが、グルグルと頭の中で回っていく。

「ちくしょう。ちくしょう。」

まだ、村は見えていない。しかし、空が赤く燃えていた。

―来るのが遅いよ―

頭を過る記憶。

―ねえ、約束しよう―

どうして思い出す。なんで、今あの子のことを思い出さなきゃいけない。

—あなたは優しい人よ—

やめろ。やめてくれ。

—わたしね、それでも信じたいの—

—駄目なのかな、夢み

たら—

—どうして、そんなに悲しい顔するの—

—きつ

と大丈夫よ—

—雅人。良い名前じゃない—

—わたしはね—

—悔しいよ。やっぱり—

—可愛くなくたって良かったの—

—強い人になりたかったよ—

—雅人。きつとなつてね、強い人に—

そこはまさに、地獄絵図だった。村の人々が逃げまどい、それを本当に楽しそうに追い回す男たち。

バイクを放り捨てて、燃える村に飛び込んでいく。

男が数人で取り囲んでいる真ん中に人が倒れていた。顔は男たちの影に隠れて見えない。

ボロボロにされたネグリジェから出ている脚だけが見える。

赤く燃える火のなかで、見えるネグリジェの色はピンクだった。

—でも、やっぱり助けてほしかったな—

頭に流れていた記憶が終わりを告げた。

そして、それは始まり。

まるで、無数の虫が足のつま先から髪の毛の一本一本まで走っていくような感覚。

髪の毛が逆立つのがわかる。

知っている。『これ』をこの感情を自分は知っている。いや、感情なんて呼べるものじゃないのかもしれない。

それは、悲しみよりも激しく、怒りよりも甘い。

—殺さずにすむかもしれない—

あの思いも。

—恐怖を受け入れることだ—

あの言葉も。

もう何の意味もない。これに身体が支配されたら、意味なんて消えてしまう。

知っている。これは、これが—

『狂気』

気がつけば叫んでいた。

殺してやる。ぶっ殺してやる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4451i/>

僕の物語

2011年10月6日01時35分発行